
R P G

十六夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

RPG

【コード】

N5758T

【作者名】

十六夜

【あらすじ】

15種類と豊富な職業！ 初心者でも分かりやすい操作性！
誰でも簡単にできる新感覚RPG。

ようこそ！ Real Playing Gameの世界へ！

お金は一切かからない！ 課金システムが無い事で、プレイヤーの強さのバランスが崩れないこのゲーム。

さあ、いざ登録画面へ！

Prologue (前書き)

初めまして、十六夜です。この度はRPGをプレイ（読んで）頂き、誠にありがとうございます。

Prologue

1

11月10日、僕は死んだ。死因は事故死。簡単だった。トラックが突っ込んできたと思っただら、次の瞬間には重くなった身体。力が上手く入らず、首を動かす事も出来ない状態で道路にはおびただしい血。もう一度言う、僕は死んだ。目をつぶり、死を受け入れた。薄らとだが救急車の音が聞こえたが、僕はそこで意識を失った。

「……ゲームを始めますか？」

はい いいえ」

誰かがそう呟いていた事も知らずに……。

3

2

「ゲームを始めますか？」

はい いいえ」

どう言う事だ？ 僕はさっき死んだはずじゃ？ それに、今目の前にあるこの画面は何だ？ そして何故僕からこの画面から出ているケーブルが繋がっているんだ？

「ゲームを始めますか？」

はい いいえ」

ゲームを始める以前に、どこにコントローラーが有るんだ？ まさかこのケーブルで、僕の思考での操作が可能とかじゃないよな？

そう思いながら僕は矢印がはいにあるので、恐る恐る頷いた。

「ゲームの設定に入ります」

！？ やはり僕の思考での操作が可能なんだ！ こんなゲーム見た事も、聞いた事も無い。しかし、何か面白そうだ。

僕は好奇心に負け、そのままゲームの設定を行う。

「職業を選択します（男・女）」

その表示が出ると、画面にずらっと職業の一覧と説明が出てくる。
セイバー

剣を使った近距離攻撃型。高い攻撃力と防御力を誇る。攻撃速度の速さと安定した火力で相手を翻弄し戦う事が出来る。規定のレベルまで達すると、剣を使った上級職のどれかに転職する事が出来る。

アーチャー

弓を使った遠距離攻撃型。長い射程と大量の専門スキルを誇る。

高台からの攻撃は通常の1.5倍のダメージを相手に与える事が出来る。規定のレベルまで達すると、弓を使った上級職のどれかに転職する事が出来る。

ランサー

槍を使った中距離攻撃型。長いリーチの高い火力と攻撃速度を誇る。専門スキルの心臓突ハートブレイカーは自らより速度の遅い生きている相手に対して一撃必殺をする事が出来る。規定のレベルまで達すると、槍を使った上級職のどれかに転職する事が出来る。

マジシャン・ウィッチ

魔法を使った魔法攻撃型。圧倒的な攻撃力と攻撃範囲を誇る。魔法発動までの時間が少しかかるが一撃必殺級のダメージを相手に与える事が出来る。規定のレベルまで達すると、魔法を使った上級職のどれかに転職する事が出来る。

ガーディアン

盾を使った防御特化型。攻撃力こそ低いが圧倒的な防御力を誇る。防御上昇スキルを初期から豊富に持っており殆どダメージを負う事が無い。規定のレベルまで達すると、盾を使った上級職のどれかに

転職する事が出来る。

パラディン・シスター

剣と聖魔法を使った万能型。安定した攻撃力と補助スキルを持つ。体力回復系統の魔法を多く習得する事が出来る。規定のレベルまで達すると、エクスパロディン聖剣騎士に転職する事が出来る。

エグゼキューションナー

剣と黒魔法を使った万能型。圧倒的な攻撃力と異常なスピードを誇る。防御力は低いが超攻撃型スキルを多数習得する事が出来る。規定のレベルまで達すると、ジェノサイダー魔剣騎士に転職する事が出来る。

ガンナー

銃を使った遠距離攻撃型。圧倒的な攻撃速度と多彩な専門スキルを誇る。専門スキルの魔弾はMPを多く消費する代わりに圧倒的な攻撃力を持つ。規定のレベルまで達すると、銃を使った上級職のどれかに転職する事が出来る。

シーフ

盗賊の近距離攻撃型。高い攻撃速度と移動・回避速度を誇る。体力と防御力は低いが回避能力が他の職業に比べ圧倒的に高い。規定のレベルまで達すると、盗賊系統の上級職のどれかに転職する事が出来る。

アサシン

多くの武器を使った一撃必殺型。高い隠密性と多彩なスキルを誇る。殆どの武器を装備でき隠密攻撃の殆どがクリティカルダメージになる。規定のレベルまで達すると、暗殺者系統の上級職のどれかに転職する事が出来る。

サモナー

召喚魔法を使った魔法攻撃型。数多くの召喚獣と多彩なスキルを誇る。致命的レベルまでに低い攻撃力や防御力、体力を差し引いても召喚獣の攻撃力や体力等は圧倒的。規定のレベルまで達すると、召喚魔法を使う上級職のどれかに転職する事が出来る。上級職のどれかに転職する事が出来る。

ヒーラー・ナース

補助魔法を使った後衛補助型。数多の回復スキルと攻撃補助スキルを誇る。攻撃力は致命的だがスキルを使った回復量はパラディン以上。規定のレベルまで達すると、補助魔法を使う上級職のどれかに転職する事が出来る。

ファイター・アマゾネス

ガンレットを使った近距離攻撃型。安定した火力と高い速度を誇る。体力や防御力も高く育てやすい職業。規定のレベルまで達すると、ガンレットを使った上級職のどれかに転職する事が出来る。

バトラー・メイド

ほぼ全ての武器を使える万能型。数多のスキルと高い全ステータスを誇る。エグゼキューター以外の職業の武器を扱う事が出来るが主が攻撃されると変わりにダメージを受ける。規定のレベルまで達すると、執事長もしくはメイド長リーダーメイドに転職する事が出来る。

ロード

主に魔法を使った遠距離補助型。数多の補助スキルと圧倒的なMP量を誇る。バトラー及びメイドが仕える職業で、原則的にバトラー及びメイドと行動を共にしなければならない。規定レベルまで達すると、七人貴族セブンローズに転職する事が出来る。

全部で15の職業が有った。多すぎる。クソゲー臭が半端無くするが、とりあえずやり続ける事にした。と言うより、やり続ける以外の選択肢は頭に浮かばなかった。僕はエグゼキューショナーを選択する。理由は攻撃力だ。僕は今までしてきたゲームは全て攻撃力を重視してきた。今回もそれだ。

「エグゼキューショナーで決定しますか？」

はい　いいえ」

僕は頷き、次の設定に入った。

「性別を選択します」

男　女」

当然男を選択する。

「生前ボーナスを割り振ります（余ったポイントは後で割り振る事が可能）」

はい　いいえ」

生前ボーナス？　聞いた事が無い。良く画面を見ると下に説明が小さく乗っている。

生前ボーナスとは生前に働いた善行や、受けてきた試練などから得る事が出来るポイントです。

どう言う事かはいまいち理解できないが、とりあえず頷く。

「プレイヤーの生前を検索します」

すると画面に多くの文字が現れる。暫くそれを見ていると検索終了と言う文字が出てきた。

「プレイヤーの生前ボーナスは全平均140ポイントより351ポイント多い計491ポイントです」

おお、平均よりもかなり多いな。何か得した気分だな。そんな事を思いながら僕は画面を見る。

「ステータス

体力：666

魔力：098

突き：129

斬り：153

魔法：112

防御：041

対魔：054

技量：081

回避：095

速度：105

命中：102

特殊スキル

虐殺（Lv1）：敵を倒すたびに攻撃力アップ。

狂人化（Lv1）：MPを半分消費しそのバトル中の攻撃力を1.5倍にする。

黒魔術（Lv1）：体力を少しずつ回復していく。

習得スキル

死刑執行（Lv1）：1/10の確率で一撃必殺。

山斬一閃（Lv1）：遠くにいる相手に斬撃を飛ばす。

虐殺行為（Lv1）：周囲にいる敵に斬撃を浴びせる。

生前ボーナスを使用してこれらを変更する事が出来ます」

成程、理解した。つまりボーナスは多い方が有利にゲームを始められる事が出来るのか。平均が有ると言う事は他にプレイしている人がいると言う事。なら強い方が言いに行き詰っている。僕も時々オンラインゲームをしたが、レベルが高く強い人に倒していた敵を持つていかれたり、初心者同士で勝負していた所にいきなり乱入してきて勝利回数を上げたりする奴がいたからこれは嬉しい。

僕はまず、特殊スキルから見えていく事にした。特殊スキルの見たいと思うと、一覽らしきものが現れる。上に最大でLv5までと書いてあるので僕は黒魔術にポイントを5消費してLv2にした。同様に虐殺と狂人化もLv2に。次にステータスの中の防御をポイントを20消費して20上げた。同様に対魔と技量と回避と速度も20上げた。次に習得スキルを見る。上に第一次スキルと書いてあるのでスキルは第二次スキル等もあるのだろう。今現在あるスキルは上記の三つと狂剣乱舞と言う連撃スキルと魔剣召喚と言う攻撃力上昇スキルのみだ。僕は全てをLv3まであげる。消費ポイントは75。僕は再び特殊スキルにポイントを振り、Lv3に上げる。ステータスに戻り、HPとMPを上げる。HPに20消費してHPを766、MPを198に上げる。残ったポイントを100ポイントになるまでステータスに均等に割り振る。その結果が画面に出る。

「ステータス

体力：821

魔力： 2 5 8
突き： 1 4 1
斬り： 1 6 5
魔法： 1 2 4
防御： 0 7 3
対魔： 0 8 6
技量： 1 1 2
回避： 1 2 7
速度： 1 3 7
命中： 1 1 4

特殊スキル

虐殺 (Lv3)： 敵を倒すたびに攻撃力アップ。

狂人化 (Lv3)： MPを半分消費しそのバトル中の攻撃力を2.5倍にする。

黒魔術 (Lv3)： 体力を少しずつ回復していく。

習得スキル

死刑執行 (Lv3)： 1/5の確率で一撃必殺。

山斬一閃 (Lv3)： 遠くにいる相手に斬撃を飛ばす。

虐殺行為 (Lv3)： 周囲にいる敵に斬撃を浴びせる。

狂剣乱舞 (Lv3)： 連続して5回の強攻撃を相手に当てる。

魔剣召喚 (Lv3)： 攻撃力を3分間1.5倍にする。

ポイント残り100。以上で設定を終了しますか？」

僕は頷き、ポイントを振り終える。

「最後にもう一度問います。

ゲームを開始しますか？

はい いいえ」

何が言いたいんだ？ 此処まで来たのに今さらいいえにする訳がないだろう。僕は再び頷き、画面を見た。

「ようこそ、可能性の世界へ。 Real Playing Gameの世界へ！」

その表示が出た瞬間、僕の身体は血を噴き出した。そこで、僕の意識は失われた。

目が覚めたら森の中（前書き）

システム（小説）を更新。時間がかかりますが、メンテナンス（小説を書く事）が終わり次第、システム（小説）を更新していきたいと思います。

目が覚めたら森の中

1

ハツと目が覚める。其処に広がるのは何時のも部屋……では無く森だった。と言う事だ？ 僕は確か家に帰る途中で……途中で………！？

「死んだはずじゃ!？」

身体を確認する。しかし怪我は愚か血の跡すら無い。と言う事なんだ？ 生き還った？ 否、それはあり得ない。ではあれは夢だった？ 否、今の現状を説明する事が出来ない。ならば、あのゲームが、確かRPGだったか？ あれが現実になった。……まだ証拠が足りないので保留。では、今現状の自分を確認してみよう。

黒いローブの下に黒い服とズボン。髪の毛の長さはいつも通り腰のあたり位まである。腰には剣が一本と懐中時計。

? 懐中時計が何かおかしい。僕はそう思い懐中時計を開く。すると浮き出て来たのが

あかつき

そうつげつ
紅月 蒼月LV1

職業

エグゼキューションナー

ステータス

体力: 821

魔力: 258

突き: 141

斬り: 165

魔法: 124

防御: 073

対魔： 0 8 6
 技量： 1 1 2
 回避： 1 2 7
 速度： 1 3 7
 命中： 1 1 4
 特殊スキル
 虐殺（LV3）： 敵を倒すたびに攻撃力アップ。
 狂人化（LV3）： MPを半分消費しそのバトル中の攻撃力を2・5倍にする。
 黒魔術（LV3）： 体力を少しずつ回復していく。
 習得スキル
 死刑執行（LV3）： 1/5の確率で一撃必殺。
 山斬一閃（LV3）： 遠くにいる相手に斬撃を飛ばす。
 虐殺行為（LV3）： 周囲にいる敵に斬撃を浴びせる。
 狂剣乱舞（LV3）： 連続して5回の強攻撃を相手に当てる。
 魔剣召喚（LV3）： 攻撃力を3分間1.5倍にする。
 ポイント
 100
 装備
 銅の剣
 黒いローブ
 スニーカー
 所持金
 500ギル
 所持アイテム
 なし

と出てきた。

！？ このステータスやスキル、僕がさっき作った者と一緒だ！
 あれは夢や幻じゃなかったという事か！？ なら、僕が今いるこ

の世界は

「ゲームの中の世界……」

正確にはゲームかもしれないモノの中の世界。しかし、これは現実のようだ。夢とは違う。何故そんな事が分かるかと？ 直感だ。剣の重みから、呼吸している感じまで現実に近いからとしか言いようがない。

街に行かなければいけないのかもしれない。このLv1というのはゲーム内での僕のLvを現す数値だろう。高ければ高い方がいい。一応ポイントを振っている分、そこいらのLv1よりは強いと思うが……。

そう思っているとガサガサと茂みが揺れる。僕はその方向を向き、茂みを揺らしているモノが現れるのを、剣の柄を持ち待つ。

「……………嘘だろ……」

最悪のケースと言うやつだ。恐らく、初エンカウントだろう。敵は一匹の巨大な熊。しかし普通の熊では考えられない事が一つ。手が全部で四本なのだ。背中から突き出た不自然な二本の腕。

僕は剣を抜き構えを取る。その瞬間、硝子の割れたような音がし、BGMらしき物が流れ始めた。

「まんまゲームと言う訳だ」

僕はそう呟くと、熊……四手熊に斬りかかった。何故名前が分かったかと言うと、頭の中に情報が流れ込んできたからだ。当然、ゲームの様にだ。斬りかかった理由は相手のレベルが2と言う事で。

「ガアアアアアアアアアア……！！！！」

四手熊は叫び威嚇するが、僕はそれを無視して斬り付ける。

「フンッ！」

すると四手熊の腹が切れ、少し血が流れる。痛みで一瞬硬直した相手に僕は留めと言わんばかりにスキルを発動し攻撃する。

「狂剣乱舞……！！」

叫ぶと身体が勝手に動くと言うのだろうか？ 上段から下段に斬り落としそのまま右に斬り裂き左斜め上に斬り上げ左斜め下に斬り

おろしトドメと言わんばかりに右真横に斬り裂く。終わると同時に四手熊は血を流し倒れ消えた。後に残るのは熊の毛皮と50ギル。その瞬間にBGMが変わり、頭の中に情報が流れ込んでくる。

獲得経験値：00031

ボーナス経験値：00050

獲得金額：00050

最大Hit数：00005

戦闘時間：122.1

獲得ポイント：00001

アイテム熊の毛皮を拾った

こう頭の中に現れた。成程、大体このゲームの流れがつかめてきた。僕は剣をしまい、とりあえず道らしきものを歩く事にした。

2

その後も何体かのモンスターと出くわし、暫く進むと村らしきものが現れた。僕は少し走り、その村へと入る。

森林の村（ミーミツ）

再び頭の中に情報が流れ込み、BGMが変わる。活気のある村だ。見た限り、人々はみんな笑顔。僕がそう思いながら辺りを見まわしている、一人の少年が話しかけてきた。

「ようこそ森の都ミーミツへ」

「え？ あ、どうもこんにちは」

僕はどう言っただいいか分からず、とりあえず挨拶をする。

「こちらこそこんにちは、冒険者様」

「冒険者？」

「え？ 違いましたか？ その剣から職業はセイバーだと思ったのですが…」

ああそう言う事か。しかし、僕の職業はセイバーでは無い。

「すまない。僕はエグゼキューションナーなんだ」

「！？ 傍観者様でしたか。これは申し訳御座いませんでした」

さつきから何なのだろうか？ この傍観者とか冒険者とか。

「あ、宜しければこれをどうぞ」

初心者を書を貰った。

「参考にしてください。では、失礼します」

少年はそう言うとその場を去った。僕はとりあえず貰った本を見る事にした。

「えっと何々……職業と職種について……」

目次からその項目を見つけ出し、読み始める。

冒険者とはセイバー、アーチャー、ランサー、マジシャン及びウィッチ、ガーディアン、ガンナー、シーフ、ファイター及びアマゾネスの事を指し、育ちやすく全体的にもバランスが取れている職業の事。圧倒的な力はないものの、一番やりやすい職業の事を指す。

助言者とはサモナー、バトラー及びメイドの事を指し、育てにくいが全体的に突出した能力を持っている。特殊能力は凄いが、その分のハンデも大きい。

救援者とはヒーラー及びナース、ロードの事を指し、回復やサポートに関しては断トツに育てやすい職業の事。しかし攻撃や防御面が致命的なので、どちらかと言えば育てにくい。

日陰者とはアサシンの事を指し、数多くの武器を装備する事が出来る。スキルも豊富でバトラー及びメイド並みのステータスも持っている。しかし、体力や防御力はレベルが上がってもそこまで大きくなるわけでは無いので、少し癖が強い。

主観者とはパラディン及びシスターの事を指し、安定した強さや回復スキルの多さを見せてくれる。育てにくいだが、初期から高い能力を持っている。

傍観者とはエグゼキューションの事を指し、他の職業と比べ物にならない位圧倒的な攻撃力と行動速度、殺人的なスキルを持っている。育てにくく、防御も低いので、一番やりにくい職業とも言える。

「成程……面倒なのを引いたようだな。まあ、攻撃力が有ればある程度の事は何とかなるから良いか」

僕はそう思い本を懐中時計の近くまで持っていく。すると本は懐中時計に吸い込まれるように消えた。森で確認したのだが、どうやらこの懐中時計はアイテムボックスの様な役割もあるらしい。便利で良いな。

そんな事を思いながら僕はとりあえず村を散策してみた。すると武器屋の様なものを見つけたので、入ってみる事にした。

「いらっしやいませ」

店員が挨拶をしてくる。僕はそれを軽く流し、剣などが置いてある場所を見た。すると頭の中に店にある武器と、今自分が装備している武器が出てくる。

まず自分が装備している物は

銅の剣

突き攻撃	5 1
斬り攻撃	6 5
魔法攻撃	4 5
防御補正	0 0
対魔補正	0 0
技量補正	0 1
回避補正	0 0
速度補正	0 2
命中補正	0 5
装備運度	0 3
付属属性	...

となつてゐる。装備運度とはなんだろう？ 僕は気になり初心者の書を取り出し読みだす。

何々、装備運度とは、装備品を装備した場合の敵からのダメージクリティカル率の事を指す。高ければ高い程、クリティカルダメージを受ける可能性が低いと言う訳だな。

成程、つまり装備運度も高い方がいいと言う訳か。とりあえず、店の一番高い商品を見てみよう。

ロングソード	1000ギル
突き攻撃	130
斬り攻撃	153
魔法攻撃	121
防御補正	000
対魔補正	000
技量補正	002
回避補正	000
速度補正	000
命中補正	005
装備運度	005
付属属性	-

まあ、最初の村だとこんなものだろう。とりあえず、ボクの所持金は今950ギル。後50ギル足りない。僕はそこで店員に話しかけた。

「すみません、アイテムを売りたいのですが」

「はい、お売りになるアイテムをお出してください」

店員がそう言ったので、僕は熊の毛皮を9枚出した。

「熊の毛皮が9枚ですね。合計で180ギルとなります。本当に売りますか？」

店員がそう尋ねてきたので、僕は頷いた。

「180ギルとなります。ありがとうございます」

僕は180ギルを受け取る。そして次にロングソードを買った。

「今装備している銅の剣は250ギルで買い取り出来ますが、どうしますか？」

成程、買ってすぐ装備した時は、前の装備をそのまま売る事が出来るのか。僕はロングソードを装備しているので、額き250ギルを受け取った。そして武器屋をでる。

「ありがとうございます」

僕は店を出て、辺りを見まわした。すると少し暗くなっていたので、僕は宿を見つけ入る事にした。

「いらっしやいませ。森の休憩所にようこそ。25ギルで休憩、50ギルで宿泊が出来ます」

僕は宿泊の方を頼み、部屋に入った。

「フウ……本当にゲームの中の世界だな……」

僕はベットの上で寝ころび、そう呟いた。そして目をつぶり、そのまま眠りについた。

イベント戦(前書き)

本日最後のシステム(小説)更新。

イベント戦

1

次の日、僕は村の近くの遺跡に来ていた。理由は簡単、回避不可イベントだ。村を出ようとした時、村長らしき人に話しかけられこのイベントが発生した。何でも、この遺跡にでる黒い影の正体を暴く事と、モンスターだった場合の討伐のイベントらしい。黒い影と言っても、この遺跡自身がコケや蔦やらで濃い緑色をしているので、黒い影を見つけてるのはかなり至難の技があるだろう。

「……………そう思っていた自分が間違えてした」

僕は突然そう呟いた。何故なら、入ってすぐ黒い影が出現したからだ。ウワァ、ヤッパリ最初のイベントだから簡単にしてあるんだ。

「汝……………魔王の剣を持つ者……。闇に……………魅入られ……………我等の……………同類……………それ即ち……………剣」

??? どう言う意味なのだろう？ 何かの伏線か？ まあとりあえず、この場合はこのモンスターを倒すことでイベントは終了なのだろう。僕はそう思い、ロングソードを構えた。硝子の割れるような音と共に、BGMが変わった。

く魔王の影く L V 3

このモンスターの名前とLvが頭に浮かぶ。成程、僕よりLv2高いと言う訳か。まあ苦戦はするが、何とかなるだろう。

「狂人化発動！」

その瞬間、僕の影から黒い渦が発生し僕を包み込んだ。そして黒いオーラが僕あふれ出る。

「成程、これが狂人化の効果か。これで攻撃力が2.5倍。ならも

う少し上げるとしよう。

魔剣召喚！」

今度は剣を黒い渦が包み込む。そして剣の色が黒く染まる。

「行くぞ！」

僕は魔の影に斬りかかった。影と言っても斬った手ごたえはあるし、斬った場所からは黒いオーラが溢れている。ダメージはあるようだ。

「グウ……………まだ……………！」

ズオツと言う効果音と共に、魔の影から無数の黒い影が伸びてくる。職業の特性上、速度は高いので難なく避ける事が出来たが、攻撃の当たった木や土がかなり抉れている所を見て、当たったら危険だと分かった。しかし、倒さない事にはどうしようもないので、僕は再び攻撃を仕掛ける。

ゲームの補正なのは知らないが、何故か恐怖心が薄い。普通なら逃げ出す様な化物だが、僕の中で逃げると言う選択肢は薄かった。恐らくゲームの補正なのだろう。

僕は距離を置き、スキルを発動する。

「山斬り一閃！」

僕がそう言い剣を振ると、斬撃が地面を軽く抉りながら、魔の影に当たった。

「グガア！……………テネブラエランス！」

相手もスキルを発動したようで、さっきとは倍以上の影が僕を襲う。僕はかるうじて回避をし、再び距離を取った。ここで魔剣召喚の効果も切れた様で、剣から黒いオーラが消えた。

「えっと……………マジックリーフ」

僕がアイテムを取り出し、その名前を言うと、アイテムは消えMPが回復した。HPやMPのメーターも懐中時計に備わっているようで、すぐに分かった。僕は再び魔剣召喚を発動し、一瞬で近づいて攻撃を行った。

「狂剣乱舞！」

上段から下段に斬りおろし、そのまま上段に斬り上げ左に斬り裂き、切り返して右に斬り裂く。そして止めに胸元を一突き。攻撃力が上がっている僕の攻撃は、かなり聞いた様で大きく相手はのけぞった。

「ルガア！ まだ………まだ………まだ………まだまだまだまだ！」

魔の影はそう叫びながら、再び体制を整える。しかし僕はそのままスキルを発動した。

「死刑執行……！」

スキルを発動した瞬間黒い影が剣から飛び出て、相手を襲った。

しかし、頭の中にmissと浮かぶ。失敗したようだ。しかし相手の体制はまだ整っていなかったため、僕はそのまま斬り付けた。

「ハア……！」

「！？！？！？！」

今度はcriticalと浮かぶ。成程、大ダメージを与えられたんだと言う訳か。あれ？ 攻撃ができない。どう言う事だ？

「成程、そなたの力………見せてもらったぞ。………なら………次は此方の番だ！」

これは、相手の強制発動スキルのようにだ。

「力の大きさゆえ理から外されし我等傍観者

無限の時を垣間見て

永遠の時を生き続ける

汝それに耐える事が出来るか

それが無理ならここで死を

行くと云うなら地獄を味わえ

見よ、これが無限の地獄だ！

大罪崩壊『クレイジー・インフィニティ』！！』

その瞬間、相手の影が僕の体の中に入り込んでくる。

死にたい………死にたい死にたい死にたい死にたい死にたい死にたい死にたい死にたい死にたい死にたい死にたい！ たたただ頭の中にその言葉が浮かぶ。

ぶ。

また自分だけが生き残った。もういい加減に……死にたい……

「!? 不老不死不死身と言うやつか……」

「そうだ。……我等……傍観者は……持つ力が大罪。……死を許されず……悠久の時を生き逝く存在。……貴様に耐えられるか? 親しき者が死んで逝くのに……自分だけが生きていくこの苦しみが……」

親しきものね。残念な事にゲームの世界に入ってからにはそんな人達はいないんだし別に、不老不死不死身だろうがどうとも思わないね。

「引き返すなら……剣を納め……無限の地獄に落ちるのであれば……我を斬れ!」

魔の影はハッキリとそう言った。だから僕は迷うことなく斬り裂いた。その瞬間、自分の身体が斬れていた。

「!? な…何が!？」

痛みはない。あるのは驚きだけ。何故僕が斬れた。何故僕の身体から、ブロンズソードが付き出てきているんだ!

斬られた部分から黒いオーラが溢れだし、僕が現れる。

「!?？」

「……僕は選んだ……無限の地獄を。……終わる事のない……悠久の苦しみを」

それだけ言うと、僕は消え去った。気付けば、魔の影も消えていた。どう言う事なのだろう? 傍観者、無限の地獄、不老不死不死身……恐らく、これは職種別の強制イベントなのだろう。

「傍観者……エグゼキューション……一体どう言う職業なんだ?」

獲得経験値: 00211

ボーナス経験値: 00050

獲得金額: 01521

最大Hit数: 00005

戦闘時間: 645.9

獲得ポイント：00003

Lv3に上がった

アイテム”魔王の欠片”を拾った

アイテム”紅い剣”を拾った

アイテム”開かない懐中時計”を拾った

スキル”無限煉獄”を習得した

三つもアイテムを拾ったな。何々

魔王の欠片

太古の昔存在していたと言われる魔王の心臓だった物らしい。

紅い剣

刃が血の様に真っ赤な剣。少し細い両刃剣だが、耐久力はかなり高い。

開かない懐中時計

錆び付いているわけでもないが、ただ単に開かない懐中時計。Diabolus XII Swordと彫つてある。

成程、どうやら紅い剣は装備できないらしい。少し残念だ。でも、新しいスキルを習得した事は嬉しい。

僕は早速ポイントを使いスキルを習得した。ポイントが147に上がっていた。恐らくレベルアップ等が原因だろう。これは嬉しい。僕は早速15ポイント消費し無限煉獄をLv3に上げた。

その後、僕は報告の為に村に戻った。

2

村に戻り僕は村長に魔の影を盗伐した事を報告すると、お礼と言う事で1000ギルと100経験値を貰った。僕はその後、ローブなどの衣類品を一着ずつ買い、村を出た。そして暫く行ったところ

で一人の男と遭遇した。

「どうも、こんにちは」

「…こんにちは」

ニコニコと笑顔を振りまきながら近づいて来る男。何者なのだろうか？

「ゲームをお楽しみいただけていますか？ このReal Playing Gameを」

なんだと！？ この男、今ゲームを楽しんでいると言わなかったか？！

「おや？ 私が何者かって顔をしていますね？」

僕は男の問いに静かに頷く。

「では自己紹介と参りましょう。私はこのゲームの創造者、リードハイデルト・ヴァンウィンクル・クルセイダー・オーディアン。長いのでリードルトと親しい人達には呼ばれていたね。あ、ちなみに私はあなたの名前を知っているので言わなくて良いよ」

「は、はあ……」

何なんだこの人は？ それに創造者？ このゲームを作ったと言う事か？

「あなたの考えている事は私がこのゲームを作ったと言う事かどうかな？ その答えはYES。このゲームは私が作りました」

「！？ ヤッパリ。しかし、これは本当にゲームなのか？ 僕にはこれが現実には見えない」

僕がそう言うと、男：リードルトは少し黙った。そして口を開き一言言った。

「君は、異世界…もしくは別宇宙と言う存在を信じるかい？」

「??？ いきなり何」

「良いから答えて！」

「………あると言われればある、無いと言われればない。そんな感じだな」

僕がそう言うと、男は成程と一言言い腕を組んだ。

「じゃあ、質問を変えよう。君は、いや、君が元居た世界は本当に君が思っている現実の世界なのかい？」

「？ 何が言いたいんですか？」

意味が分からない。僕はそんな哲学？ 的な事は全く分からない。

「だから、君のいた世界はゲームの中の世界じゃなかったのかわつて話！」

「……ハア？ そんな事は」

「あり得ない？」

空気が凍りつくような不気味は雰囲気男から発せられる。僕はそれに気付き、萎縮してしまった。

「誰がそれを証明したんだい？ 君が言うように、この世界の様にゲームの中の世界だったかもしれないのに」

そう言われればそうかもしれない。だがそれこそ証明ができない。誰にも確かめることはできないからだ。ゲームの中の登場人物が、いくらこれはゲームの世界で、現実世界は別にあるんだと言ったところで、現実の世界に来れる訳ではない。

「生き物の想像は、それが全て独自の世界を作って行く」

「独自の…世界……」

「そう。例えば漫画。これは漫画家が想像し人物を作り、世界観を作り出したモノ。その漫画が生まれる瞬間、世界が生まれるんだ」

仮想世界と言うやつか？ いや、もつと難しい物なのだろう。僕には到底理解できない様な、とてつもなく難しい。

「漫画はその世界の存在する証明。そして、その世界を創造するキツカケの様なものさ。後は、独自の成長を遂げていく。漫画は、その中の可能性の一つを現した物なのさ」

「……じゃあ、ある漫画の二次創作が出来たとする。それも」

「その世界の可能性さ。世界には無限の可能性の分岐世界が存在するのさ。可能性の数だけ、その世界が生まれる。そして、その可能性を作り出したモノが死んだ時、そのモノが作り出した可能性の世界は全て消える。まあ、漫画は別だけどね。あれは後世まで残るし」

記していない日記は、どこにも記録が残らないでしょうと男は言い笑う。

「じゃあ、あなたの理論から行くと、この世界も誰かが作り出した世界の可能性の一つ…」

「うん、その通りさ。いやあ、君は賢いね」

「話を聞いていれば理解はできるさ」

此処まで聞いて分らない方が逆におかしいと思う。

「まあ良いけどね。そして君が選んだ職業。全く、君は生前から貧乏くじを引くのが上手いみたいだね（笑）」

「！？ やはり僕は死んでいるのか！？」

「おや？ 今まで気づいていなかったのかい？ まあそれも無理はないと思うけど」

そんな、やっぱりあの時僕は死んだんだ…。なら、何故僕は生きている？ なぜ今この地に立ち、呼吸をして、自分の意思を持っている？

「クスクスクス、随分と困惑の表情を浮かべているね。まあ別にいいけれど。でも一つ忠告、今此処で考え込んだって、生き還れるわけではないし、元の世界に戻るわけでもない。割り切った方が身のためだよ」

確かにそうかもしれない。しかしそれは客観的に見た場合の意見だ。主観的、つまり体験している僕から言わせてみれば、これ以上に衝撃的な事実は何もないだろう。

「……わ、割り切るのは無理だ。でも、話しは続けよう。エグゼキユーションが何故、貧乏くじなのかを聞いていいかい？」

此処まで教えてくれるかどうかは謎。だが、聞けるときに聞いとかなければ後悔する事が多い。僕の場合は、それで大きな後悔をしている。

「うーん、まあ良いですよ。とりあえず言っておけば、君の職業は初期から大きな力が得れる。と言うより、他の職業と比べた場合、君の職業は無双出来るレベルだ」

「無双ですか…」

余りにもバランスがおかしくないかそれ？

「でもね、君の職業の場合……一匹狼って感じなのさ。まあ大切な職業なんだけど、他の職業から見たら敵の幹部レベルだから」

「……ハア？」

「クス、君の今の顔凄い面白いよ！ えっとね、君の職業の職種である傍観者はね、他の職業の言わばストッパーとか、サポーターみたいな存在なんだ」

「ストッパー？ サポーター？」

「うん。ゲームとかで良くある、最初は味方として出てきたけど、暫く行くと敵として出てきて、また暫く行くと味方が敵のどちらかで出てくるキャラみたいなのやっ？」

「……本当に貧乏くじだなおい。僕の一番嫌いなキャラじゃないか。味方として出て来た時に圧倒的な力を見せ、その後再登場で完膚なきまでに此方を叩き潰すキャラ……。はあ……鬱だ……」

「クスクス、そう落ち込むなって！ まだ一時スキルの段階だから、他の職業と絡む事も無いし、無双状態になる事も無い」

「よし、ならばこのままLvを上げずにいよう。」

「でも、ある程度時間が経つと、強制イベントで転職になるから気を付けてね」

「僕の考えを速攻で否定するな！」

「僕がそう言うとりーデルトはまたクスクスと笑い、此方を見た。」

「ちなみに、これも一種のイベントなんだよね」

「……ア？」

「おっ！ 言い表情だ！ まあそれはさておき……君のアイテムの中の魔王の欠片と紅い剣と開かない懐中時計を出して」

「嫌だ！」

このコマンドは選択できません

僕の頭の中にその言葉が流れてくる。

そんな馬鹿な！

僕はリーデルトの方を見る。すると、ニヤニヤしながら此方を見ている。ウゼエ！　かなりムカつく！

「クスクスクスス、コレも強制イベントなんだよね」

スガ一つ多い！　しかしムカつく！

僕は渋々リーデルトにアイテムを渡す。

「……………ちょっと待ってて」

リーデルトはそう言つと、その三つを掲げた。するとその三つが勝手に交わり、懐中時計だけになった。

「うん、これでOK！　じゃあ、これを受け取って！」

僕はそう言いわれ、懐中時計を受け取る。

アイテム”12本の魔皇剣”を手に入れた

……………ハア？　魔皇剣？　しかも12本？　いやいや、どう見ても

懐中時計だろ！

「うん、良い感じに困惑しているね。まあ良いんだけど。ちなみに、それは転職してから強制装備だから。基本的には魔皇剣として装備が出来るんだけど、転職してからスキルを習得するから気を付けてね。ちなみに、そのスキルにはLvは無いよ」

リーデルトはそう言つと、近くにあった木の上にジャンプして飛び乗る。

「さてと……………君はこの世界で紅月蒼月の名を捨て、シエオル・アイン・ソフと名乗ってもらつよ」

「??？　何故だ？　何か理由でもあるのか？」

「理由はあるよ。でも、それは言えない。まあ、早く転職する事だ。いずれ強制的に転職する事になるんだから」

リーデルトはそれだけ言つと、僕の方を見て笑う。

「じゃあまた会おうね。まあ今度会う時は初めましてになるだろう

けど」

「ちよつと待て！ それはどう言う」

僕の言葉を聞かずに、リーデルは消え去った。なんだったんだ？ まあ深く考えても無駄だろう。この短時間で、あいつがわけのわからない電波野郎だと言う事は何と無くだが分かったし。

僕はそんな事を思いながら再び歩き出した。職業の事を聞いたせいか、少し足が重く感じていた。

帝都・ハイディンディート(前書き)

システム(小説)の更新完了。

あの村を出て約2週間ほどたった。その間で僕のレベルは13まで上がった。スキルはあれから増えていないが、ポイントはかなり溜まっているようだ。まあまだ使っていないが。

しかし、もういい加減野宿は嫌だ。そろそろ街、せめて集落的な物でも良いので出てきてほしい。流石に野宿は辛かった。特に、石と言つ名の猛反発枕はもう嫌だ。いい加減ふかふかの低反発枕で寝たい。そんな事を思いながら歩く、歩き続ける。そして日が落ちる直前に、街の影らしきものを見た。

この調子なら、明日には街に着ける！ 今日で猛反発枕とはお別れだ！ 街に言ったら絶対に枕を買う！ 誰が何と言おうと枕を買う！

「さてと、暗くなれば奴らの世界だ。今日は此処で行動を終えよう」
僕はそう呟き、木に寄りかかりながら地面に座った。そしてLv6の時に覚えた魔法スキルを使い火を灯す。ちなみに、奴らとはモンスター達の事だ。一回夜間行動をした時、馬鹿げたエンカウント率で休む暇がなかったのだ。しかも、出てくるモンスターが単体では無く3体とか5体とかチームで来るのだ。僕はこの時に夜間行動しないと誓った。しかし、此処は良い場所だったかもしれない。近くには川が有る。つまり水浴びが出来るのだ。出来れば温泉などの風呂に入りたかったが、いたしかたない。贅沢を言っても無駄だと言ふ事は分かったからだ。

僕はそう思いながらローブを脱ぎ捨て、川に入る。

「……ッ!? 冷たい……」

時期と言う事もあるだろうが、大分冷たかった。しかし僕は我慢して水浴びを続けることにした。とりあえず此处で魔皇剣を見てみよう。

まずは魔皇剣のステータス。

魔皇剣

突き攻撃…	8 1 6
斬り攻撃…	8 6 6
魔法攻撃…	7 9 7
防御補正…	0 0 0
対魔補正…	0 0 0
技量補正…	5 2 8
回避補正…	6 0 3
速度補正…	8 1 1
命中補正…	6 9 7
装備運度…	- 9 9
付属属性…	闇

ざっとこんな感じだ。まず一言、凶悪すぎるだろ！ なんだこのバカげた攻撃力は！ 攻撃に関係してくるステータスが馬鹿げている！ 後、速度に関するステータスも常軌を逸している。だが、防御に関する物は最初の武器と大して変わらないし、運度に関してはマイナスだ！ ダメージを受けた場合、殆どの確率でクリティカルダメージになると言う事か！ 最悪じゃないか！ ただ出さえ防御が低い職業なのに！

僕は少し怒りを抱きながら、次の武器説明の方を見る。

紅色の刃を持つ、少し細身の両刃剣。切れ味、重さ、耐久力等全てにおいて異常のレベル。付属属性の闇で、闇系統のスキルは攻撃

力が上がる。また、特定のスキルを使うと、剣が変化し攻撃力等が大幅に上がる。

……はい、チートだね。僕は確かに攻撃力が高い物は好きだが、完全に無双状態になるのはどちらかと言うと好きじゃない。面白味が無くなるからだ。しかし、この職業を選んだのは僕だ。なら、最後までやるしかないだろう。

僕はそう思いながら身体を吹き、もう一枚の服やローブを着る。そしてさっきまで来ていた服などを川で洗い、木に引っかけた。僕はそのまま食事を取り、寝た。明日こそは、枕で寝てやると言う気持ちを抱きながら。

2

次の日、僕は朝早くから行動し、昼前に街の門のところまで付いた。

「やっとだ……、やっと街に着いた」

僕は少し感激を覚えながら門を通り街に入る。

東方最大都市〜帝都・ハイデインデイト〜

頭の中に情報が流れ込み、BGMが変わる。ミーミツも活気のある場所だったが、やはり村と街では大違い。とても凄い場所だった。流石東方最大都市と表示されるだけはある。

まあそんな事はさておき、雑貨屋はないかな？

僕はそう思いながら店を探す。すると良い感じの店があったので入った。

「いらつしやいませ」

店員の声を無視し、僕はある物を探す。そして、ついに見つけた！
「すみません、これ下さい！」

僕は店員にある商品を渡し、会計を頼む。

「1000ギルになります」

僕は迷わずそれを出した。そしてついに手に入れた。

「枕が買えたよ！」

僕は嬉しくてそう言ってしまった。周りからは、何あの人的な視線を貰っている。しかし、そんな事は関係ない。僕のこの嬉しさは半端じゃなかった。

僕は暫く喜びを堪能した後、枕をしまい武器屋に向かった。なるべく転職するまでは魔王剣を装備したくないからだ。

僕は武器屋で今までモンスターが落としたりアイテムを全て売り、僕の持ち金は6400ギルになった。僕は一番高い武器を見る。

エグゼキューター…5000ギル

突き攻撃…196

斬り攻撃…206

魔法攻撃…177

防御補正…000

対魔補正…000

技量補正…008

回避補正…009

速度補正…041

命中補正…007

装備運度…000

付属属性…-

装備可能武器（エグゼキューションのみ装備可）

通称、斬首剣。処刑用に用いられる武器で、殺傷力を上げられている。

成程、この街は職業別に専用武器が売ってあるのか。例えば他の
を見るとするなら

極細鋼系… 5000ギル
突き攻撃… 000
斬り攻撃… 190
魔法攻撃… 190
防御補正… 020
対魔補正… 020
回避補正… 020
速度補正… 020
命中補正… 020
装備運度… 020
付属属性… -

装備不可能武器（アサシン・バトラー及びメイドのみ装備可）

非常に軽く持ち運びが便利な武器。突き攻撃以外はほぼ万能と言
えるが、扱いづらい所が多い。

とこんな感じだ。とりあえず僕はエグゼキューターを5000
ギルで買い、店を出た。そして一通り見て回ろうと街を歩く。する
と凄い人だかりを見つけたので、僕はそのそばに行った。

「あの、今から何かあるんですか？」

「え？ 何ってお前、今から此処に 様が来るんだよ」

「！？」

この世界に来て初めて驚愕した。嫌まさか、ただ名前が同じだけ
だ。 だとはあり得ない。そうだ、そうに決まっている。

「それによ、今日は使えているメイド達も来るんだって」

「ああ、確かメイド長の 様も来るんだってな」

な！？ だと！？ まさか、 に続き までも… 偶然な

のか。だが、僕は死んでからこの世界に来ている。あいつ等がこの
世界に来ている筈はない。そうだ、そうに決まっている！

「私は断然執事長の××様が良いけどね！」

「うるせ、このオカマ野郎！」

「誰が見るに堪えない気持ち悪い女装壁のおっさんですって！」

この人達の会話はとりあえず置いて、××！ あいつまでもこの世界に来ているのか？ あ、いや、それはないな。そうだ、野宿のし過ぎで疲れがたまっているんだ。あゝ、こういう日は早く寝るに限る。

僕はそう思い、その場から離れ宿を探した。そして僕が宿に入っ
て少しした時、外から歓喜の声が上がっていた。僕はその時睡眠を
取っていたのでそれに気付く事はなかった。

帝都・ハイディンテイト（後書き）

メンテナンス（小説筆記）を開始します。

同業者、そして対立者（前書き）

システム（小説）の更新完了。

同業者、そして対立者

1

街の騒ぎが収まり二日。僕はその日、近くの泉に来ていた。理由は特になく、しいて言うならばレベル上げと言ったところだ。

「……こっちはモンスターが居ないな……」

どうやらくる場所を間違えてしまったようだ。モンスターが一匹たりとも居ない。

「はあ……、街に戻るか……ん？」

僕が街に戻ろうと思った時、ふと一人の黒衣の人を見つけた。

「……！？ 何だあれ！？」

僕が驚いたのは黒衣の人では無い。その人の周りにある大量のモンスターの死体や、モンスターが消え落としたであろうアイテムの山にだ。

ここにモンスターが居ない理由が分かった。あの人がモンスターを片っ端っから殺しているのだ。良く見ると、あの人の近くに三人の人が居た。

「話しかけるか……否か……」

迷う。もし戦闘になればひとたまりもないだろう。あの様子からすると、レベルが絶対に違う。違い過ぎると言っても過言ではない。僕はそんな事を思っていると、三人は黒衣の人の元から去って行った。そして、黒衣の人が一瞬で僕の前に現れる。

「！？」

僕は焦って武器を取ろうとしたが、黒衣の人に止められる。

「待つんだ。僕は君と争う気はない」

僕は黒衣の人がそう言ったので、武器を取ろうとした手を納める。そして黒衣の人を見る。其処には、僕と瓜二つと言っても過言では

無い位にた男が居た。

「な…なな!？」

驚きで声が出ない。此処まで似ていると不気味だと思っ位だ。

「ふむ、君は僕に似ているね。顔立ちも、職業も、そして運の無さもね」

男はそう言い、僕を見る。職業もと言う事は、恐らく彼もエグゼキューションナー、もしくは魔剣騎士ジェノサイダーなのだろう。運の無さは余計だと思っが。

「あ、貴方は…」

「僕？ 僕は只の傍観者さ。力の強さより理から外されたモノ。君なら分かると思っけど？」

確かに。僕の職業は他の職業を圧倒する位の力を持っている。馬鹿げた攻撃力などが代表されるように。

「うん、その顔は何か心当たりがある顔だね。でも…」

男はそこで言葉を止め、僕の後ろを指差す。

「此処でお話ししている暇は、無くなった様だよ。本当に、運が無いな」

男はそう言い煙草を加える。僕は男の指差した方を見る。するとそこには白いロングコートを着て、首から十字架を下げた男が経っていた。

エクス・パラディン
「聖剣騎士」

アレが聖剣騎士なのか!？ 男の身長は約2メートル位。

「我は汝らに問う。汝らは何ぞや？」

「僕達かい？ 僕たちは傍観者さ」

僕もカウントに入れられているらしい。

男はそれを聞くと、どこからともなく二本の剣を取りだす。

「ならば汝らに問う。汝らの存在は必要か？」

「存在が必要？ そんな事は知らないよ」

黒衣の男が平然と答える。

「…地はあなたのためにのろわれ、

あなたは一生、苦しんで地から食物を取る。
地はあなたのために、いばらとあざみとを生じ、
あなたは野の草を食べるであろう。
あなたは顔に汗してパンを食べ、ついに土に帰る、
あなたは土から取られたのだから。
あなたは、塵だから……塵に帰れ！」
男はそう言うのと飛び掛かってくる。
「死ね罪人共おおおおお！！！」
ルガアと言う奇声上がるのではないかと思う位、大声でそう叫ぶ。
「フツ、猪の様な男だ。下がって居ろ、死にたくなければ」
黒衣の男がそう言い、剣を抜く。
二人の戦いが始まった。

2

「だああああうううううううううう！！！」
男が奇声を上げながら、黒衣の男に斬りかかる。
「クツ、馬鹿力が！」
「ハツハツハ！ 楽しいな、罪人よ！」
男はそう言うのと、黒衣の男から距離を取る。
「懺悔せよ！ 自分の罪を言い表せ！
さすれば神は、真実で正しい方だから
その罪を許し、清めて下さるだろう。
だから私が、汝らを神の元へと葬ってやろう」
「五月蠅いよ、聖書マニアが。何が神だ、馬鹿馬鹿しい」
「黙れ罪人！ 地の果てまで全ての人々が主を仰いで救いを得る。
神は主のみ、主以外に神は、他には居ない」

二人の言い合いが、攻撃と共に始める。

「罪人よ、貴様も信仰せよ！」

信仰がなくては、

神に喜ばれることはできん。

神に近づく者は、

神がおられることと、

神を求めるときには

報いてくださる方であることを、

信じなければならぬのだ」

「別に僕は神を信じて居る訳じゃない！」

「ぬわぁんだとおおおおお！！！」

男は大声を上げ、黒衣の男に斬りかかる。

「五月蠅い！ 魔皇狂乱！」

黒衣の男が何十回も男を斬る。

「屑が僕に太刀向かうな！」

黒衣の男の言葉と同時に、男が血まみれの状態で倒れる。

「神は我を癒してくれる！」

全て、疲れを持った人は、

重荷を負っている人は、

主に救いを求めよ。

さすれば、主は我々を癒してくれる

疲れと癒し！」

男がスキルを発動する。すると、男の傷は見る見る中に消えてい

き、再び立ち上がった。

「ハッハッハ、この程度で私を倒すことはできんぞ罪人よ」

「……………ククッ」

黒衣の男が笑いだす。

「ククッ……………フハハハハハハハ！！！」

「何がおかしい！」

「興が乗ったよ聖書マニア！ 良いだろう！ 君は僕が相手するに

ふさわしい存在だ」

黒衣の男はそう言い剣を構える。

「僕からの贈り物だ。受け取るが良い！

狂乱獄殺！！」

黒衣の男はそう言うと、男に斬りかかった。しかも、先ほどとは比にならない位の速さで。

「なあに！？」

「どうした？ この程度なのか？ ならば君は僕の前に現れ、何がしたかったんだ？」

圧倒的という言葉が正しいだろう。黒衣の男の攻撃に、男はなすすべもなく倒れた。

「グウ、今のままでは殺し切れん……次は殺す、必ず殺す、だからせいぜいその時まで生き残れ罪人よ」

男はそう言うとその場から消えた。

「……………フッ、僕もこのまま死ぬ訳にはいかないのね。さて、大丈夫かい？」

黒衣の男が僕に話しかける。

「あ、はい」

「そう、なら良かったよ」

男はそう言うと、戦闘の最中切れたであろう煙草を捨て、新しい煙草を取り出し火を付ける。

「さてと、僕は行くとするよ。君も頑張って生き残るんだ。良い事があるかもしれないよ？」

黒衣の男はそう言うと、さっきの男の様に消え去った。

「……………何かのイベントだったのか？」

僕は疑問を持ちつつ、モンスターが居ないので街の方へと戻った。

同業者、そして対立者（後書き）

「地はあなたのために」と書いた一文は、創世記3章18～19節より。

その分の決め台詞ともなる「あなたは、塵だから……塵に帰れ！」は、創世記3章19節、「あなたは、ちりだから、ちりに帰る」より。

「懺悔せよ」と書いた一文は、ヨハネの手紙 第一 1章9節を多少変えて使わせていただきました。

「信仰がなくては」と書いた一文は、ヘブライ人への手紙11章3節より。

「神は我を癒して」と書いた一文は、マタイの福音書11章28節を多少変えたものを使わせていただいております。

メンテナンス（小説筆記）を開始します。

魔剣騎士（ジェノサイダー）（前書き）

システム（小説）の更新完了。

魔剣騎士（ジェノサイダー）

1

次の日、僕は宿からでてある男の前に立っていた。それはついこないだあったリーデルトの前にだ。

「ヤアヤア、また会ったね。シエオル・アイン・ソフ。シエオルで良い？」

「リーデルト…君が付けた名前じゃないか。あと、好きに呼んでくれ」

「そう、ありがとう。まあ名前の事はさておいて」

リーデルトはそう言うと、自らが持っている鞆の中を探る。そして一枚の紙を取り出した。

「おめでとう！ Lv10以上になった君に、転職のお知らせだ！ ……忘れていた。そうだ、転職と言う訳のわからないシステムが有ったんだ…」

「えつと、これは強制？」

「うん、強制イベントさ。君は今からあるモンスターを倒しに行かなければならないんだ」

おいおい、面倒くさいな。

「ちなみに、モンスターのところまでは転移するから安心してね」

「そうかい。で？ そのモンスターてのは何なんだ？」

僕はリーデルトに尋ねる。すると彼は僕の頭に手を載せ、情報を流してきた。

神獣・ティーマト（Lv50）

光の神獣。一部地域では神として信仰されている偉大なる獣。

……Lv50だと？

「ちよつと待て！ 余りにもLvが違い過ぎるだろ！ これじゃ死ぬと言っている様な物じゃないか！」

僕は柄にも似合わず怒鳴ってしまった。しかし、これは仕方ないだろう。僕のLvは13、対する神獣のLvは50。どうやって倒せと言うのだ！

「おおおお、そう目くじらを立てずに。ああ、怖い怖い」

今すぐこの男をミンチにしたい。しかし、それが出来ないからまた厄介だ。この男が消えれば、後々面倒な事になる事は分かり切っている。

僕がそんな事を思っていると、リーデルトは口を開く。

「君にはLvうんぬじゃなくて、魔皇剣が有るじゃないか」

魔皇剣。あの普通のゲームならば最後らへんに出てくる最強レベルの武器。確かに、あれを装備すれば勝てる可能性も0では無いだろう。しかし、あれを装備すると、相手の攻撃が100%一撃必殺になる。つまり、一撃も喰らわずに勝てと言う事になる。

「余りにも無理が無いか？」

「うん、そうかな？ このゲームはLvうんぬより、プレイヤーの強さが一番大きいからね。まあ頑張ればいけるよ」

リーデルトはそう言うと、僕のアイテムボックス、もと言い懐中時計に手を当てる。すると強制的に魔皇剣が装備状態となる。そして

「じゃあ、頑張つてね」

僕は飛ばされた。

ブワンと言う音と共に、僕は一つの神殿の前に飛ばされた。其処

にはいかにも封印していますよ的な感じの鎖と、巨大な扉が有る。
「痛た…。リーデルトめ、今度会ったらただじゃおかない」

僕はそんな感じで愚痴をこぼしながら、神殿に近づいた。すると上から巨大な鉄槌にも似た光の円柱が落ちてくる。僕は咄嗟にそれを回避する。

近くで落雷があつたかのような轟音と、辺りを埋め尽くす砂煙が光の円柱の破壊力を物語っているかのようにだった。

暫くし砂煙が晴れて見た光景には驚愕した。神殿の周りにはごつごつとした巨大な岩が多くあつたのだが、落ちた所の岩は砂と化し、周りに会つた岩は砕けて拡散している。僕は少し遠くに回避していたので岩片に当たる事はなかったが、少し前に会つた木に深々と岩が刺さっているのを見て、少し顔を青くした。

恐らく、職業の特性で速度が速くなくなつたら間違ひなく死んでいただろう。全く、とんでもない所に来てしまつたようだ僕は。

僕はそんな事を思いながら街で買った煙草を取り出し、それに火を付ける。ちなみに、このゲームの中での煙草は、魔力回復薬として使え、体にいい物で出来ているらしい。全く、健康を害さずに煙草を吸えるなんて夢の様じゃないか。

そんな馬鹿げた事を思いながら、光の円柱が放たれたであろう上を見る。するとそこにはいかにもと言つた感じで光を発している巨大な鳥が一匹。

「我はこの神殿の守護獣。汝、この神殿に何用か？」

鳥が問いかけてくる。とりあえず、あなたを殺しに来ましたとか言うのは不味い。

「えつとですね、この神殿の中にある者が気になつただけですよ。何せ、旅人なものでして珍しい者には目が無く」

アウトな気もするが、殺しに来ましたよりはましだろう。

「旅人？ 成程、好奇心で此処に近づいたと」

「ええ、まあ」

僕がそう言つと鳥の気配が変わつた。

「好奇心で……やはり人間とは愚かな生き物ですね。ならば裁かねばなりません！ 我は光の神獣・ルフ！ 滅されよ、人間！」

BGMが変わり、ルフが攻撃してくる。僕はすぐさま狂人化と魔劍召喚を使う。

羽ばたくだけで台風のような風を起こす巨大な鳥。それが猛スピードで突っ込んでくる。

僕はそれを避け、持ち前のスピードで反撃した。

「鳥風情が良い気になるな！」

皮一枚と言ったところか、上手く切る事が出来なかった。流石はLv50。37のレベルの違いはかなり大きいようだ。なら、Lv10の時に覚えたスキルでも使おうかな。

「転真乱刃！ 羽根を散らして惨めに地面を這うが言い！」

厨二臭いセリフを吐きながら、僕はルフに斬りかかった。翼に一撃！ 今度は手ごたえありだ！

転真乱刃、回避不可の連撃スキル。ダメージは通常の半分になるが、20回の連撃を発動できるスキル。

「散らせ羽根を！ 散らせ命を！ フハハ：ハーツハツハツハツハツハツハツハツハツハ！！！」

どこの厨二病悪役だよとは突っ込まないでいただきたい。気分は最高だ。魔皇剣を装備しているのか、ルフのダメージは尋常ではないらしい。

「クツ、その剣は……！？ 傍観者ですなあなたは！」

ルフは驚いたような声を上げ、すぐさまスキルを使い体力を回復した。僕もその隙にMPを回復する。

「道理でLvに似合わず強い訳です」

Lvの事は突っ込んでほしくなかった。しかし、今となってはどうでもいい。ルフもスイッチを入れたと言う事が分かる。気配が変わったのだ。これは不味い事になったかもしれない。

「人間！ 我が裁きを、その肉の一片まで味わいなさい！ ジャツジメント！」

ルフが魔法を発動する。すると上から大量の羽根がゆつくりと落ちてくる。何か分からないので、僕はとりあえず避ける事にした。すると羽根に当たった物は、原子レベルと言っていていいのか？ まあそれくらいにまで分解された。

「！？ なんだそれは！」

「私の切り札と言うモノです。ジャツジメント、力の強弱問わず、当たった者は素粒子のレベルまで分解される一撃必殺と言うやつですよ」

なあ！？ そんな規格外な技まで持っているのか神獣は！

神獣本体は当たっても大丈夫なようで、魔法を発動したまま攻撃を再開する。僕は両方を避けなければならぬので、攻撃を止め回避に専念する。ルフは力も強いらしく、足で僕を踏みつけようとするとたびに、地面に巨大なクレーターを作る。とんでもない化物じゃないか！

レベルの差と言うのはそのまま力の差にもなる。圧倒的に僕が不利じゃないか！ どうやっても勝てない。勝つ事が出来ない。ならばどうするか？ どうしようもない。とりあえずは魔法が終わるまで回避に専念しなければならぬ。

「諦めなさい人間！」

「ふざけるな！ こんな所で死ぬ訳にはいかないんだよ！」

後少しで魔法が終わりそうだ。落ちてくる羽根の枚数もかなり少なくなっている。そして、ついに羽根は消え去った。ルフの攻撃を避け、僕はそのまま攻撃に撃つる。

「怪鳥風情が！ 以津真天じゃないのは残念だが、太平記巻第十二に収録されている広有射怪鳥事ひろあひけつこうじうを再現する事にしようか！」

僕はテンションがおかしくなって、最早自分で言っている事がわけが分からなくなっている。まあジャツジメントを避け切った事でテンションが上がっているのだらう。僕はこのままのテンションで、スキルを発動する。

「転真乱刃！」

再び攻撃を開始する。1回、2回と切り刻んでいく。

「僕に刃向かった事を、あの世で悔いる！ 烏風情が！」

20回目の攻撃後、すぐさま別のスキルを発動する。

「斬って斬って、斬り刻む！ 狂剣乱舞！」

一瞬にして5連撃を与える。だが、攻撃の手は止めない。攻撃は最大の防御。つまり、攻撃の手を緩めない限り相手も攻撃はできない。だからまたスキルを発動する。

「同じだが連撃を続けるにはもってこいだからな！ 転真乱刃！」

再び発動し、20連撃を与える。力が無いなら攻撃回数を増やせば良い。攻めて攻めてまた攻めて！ 手を休めれば此方が死ぬことは分かっているから、攻撃の手は休めない。

流石の神獣も、この攻撃の嵐には耐えきれない様で大分ひるんでいる。

「ガア……！？ 人間が何故ここまで！」

神獣は苦痛の表情と、困惑の表情を浮かべながら考える。

（なぜ人間が此処までやるかって？ それは私が力を貸しているからさ）

「！？ リードハイデルト！ あなたが暗躍していたのか！」

（うんうん、言い表情だ。僕はこの世界をいい方向に導くために彼に手助けしてもらっているのさ）

「クツ！ あの人間が地獄を味わう事になるのですか！」

（ああそうさ！ だからこそ、君に戦いを挑むように仕向けたのさ）

「……！？ まさか過去への干渉！」

（エクセレント！ うん、やはり君は頭が良い！ 彼がなるべく地獄を味わわないように、君を倒しそのまま過去に送るつもりでいるのさ！）

「その代償が何か分かっているのですか！」

（勿論さあ！ でも、彼は自ら傍観者である事を選んだ。偶然とはいえ魔の影を倒し、今君の前に立ちはだかっている）

「……ッ！ どうせ碌な説明もしていないのでしょー！」

（まあね。でも、この世界にとつては大きな意味を持つ。いや、この世界だけじゃない！ 彼が元居た世界も含め、今ある全ての世界の未来がかかっているんだ！ だから私は止まるわけにはいかない！）

「……リードハイデルト……、あなたと言うモノは……」

ルフは悲しそうな表情をして、一心不乱に攻撃する僕を見る。何だ？ さっきからブツブツ言っていたが、何かをするつもりなのか？ それとも、何かをしているのか？ どちらにせよ気は抜けない。「人間……名は何と言う？」

ルフは名前を尋ねてくる。この場合、リードルトが言っていた名前を名乗った方がいいのか？

僕はとりあえず、リードルトが言っていた方を名乗る事にした。

「シエオル、シエオル・アイン・ソフだ」

僕がそう名乗ると、ルフはもう一度口を開く。

「それはあなたの本当の名前では無いのでしょうか。本当の名前は何かと言うのですか？」

ルフはこれが偽名？ と言う事が分かったらしく、再び聞き直してきた。だから僕は本当の名前を答える。

「蒼月だ。紅月蒼月、それが僕の本当の名前さ」

僕がそう言うるとルフは優しい笑みを浮かべ此方を向く。

「蒼月……良い名ですね。その名前を、大切に、何時までも大切に下さい」

「あ、ああ。承知した」

再びルフの雰囲気が変わり、戦闘の空気になる。

「蒼月、これが今の我が出せる最後の技です。それに耐えきれたのなら、あなたの勝ち！ それに耐えきれなかったら、あなたの負けです！ 簡単でしょう？」

「そうだな。なら僕も、1/5の確立にける事にしようかな？」

僕はそう言うって魔皇剣を構え、ルフは翼を広げ天に向かって叫び出す。

凄まじい叫び声を上げた。その声は先程の神々しい姿からは考えられない様な、地獄の底から響いて来るような化物の叫び声。しかし、驚くべきはそのギャップでは無い。

ルフの叫び声によってなぎ倒された木々、吹き飛ばされた巨大な岩、深く抉られた地面、雲が乱れた天、一撃でも喰らえば間違えなくあの世行きだろう。しかも、なぎ倒された木の葉っぱは、最初からなかったかのように枝ごと吹き飛ばされ、近くの地面に深々と突き刺さっている。

圧倒的な破壊力。どんなに僕がいた世界の兵器を並べても、有象無象に過ぎない物になるだろう。どんなに完成された軍隊が、最新鋭の兵器を駆使して戦っても、恐らく勝てない。いや、絶対に勝てない。根本的な力が違い過ぎるのだ。

兵法の基本で、相手より数が多い事は有利と言う事は誰もが知っているだろう。しかし、此処にいる神獣・ルフはそれを根本的に否定している化物なのかもしれない。数は多くても所詮は肉体も、精神もすぐに壊れてしまう人間。その人間が数で挑むならば、この化物は人間が届く事が無い位の圧倒的力でねじ伏せる。それがこの神獣・ルフの真骨頂かもしれない。

僕は改めて思った。自分がいかに弱い存在なのかと言う事を。そして、今太刀向かっている相手がいかに強大であるかと言う事を。

「蒼月、今のはデモンストラーションです！ 次は当てに行きます！」

「!?!? ~~~~~ッッ!?!?」

体が震える。武者震いと強がるつもりはない。ただ単純に、おそれているだけだ。今日の前にいる相手に僕は、恐れ、怖れ、懼れ、惧れ、畏れている。しかし、それと同時にもう一つの感情が少し、ほんの少しだけある。それは男なら誰でも持っているであろう闘争心と言うモノ。

あいつに勝ちたい。

僕の心の中に、極僅か、1μにも達する事はない位小さな気持ち

痛みで筋肉が硬直して、叫ぶことすらできない。死を悟った。

「運命は、あなたを見離れた様子ですね」
ルフが哀れみの声でそう言う。

クソツ、此処までなのか！ 昔からそうだ、僕は肝心な時に何時も失敗に終わる。もしくは微妙な結果になる。小学校の最後のリリースの時だって、アンカーで出た僕がゴール直前で足をくじき2位で終わる。中学校の部活の大会の時だってそうだ。最後の一点が取れずに結果は3位。

その他にもさまざまな所で駄目だった。今回もそうなっただけ。何にも不思議な事じゃない。

あゝあ、此処で終わりかな。

僕がそんな事をおぼろげな意識の中思っていると、BGMが変わった。そしてその瞬間、僕の体にあった傷は全て癒え、HP、MP共に完全回復。しかし、身体の自由が聞かない。勝手に身体が動いている。

！？　　と言う事だ！　　何が起きているんだ！

ルフもこれには驚いた様で、目を見開いている。そんな中、僕は何かを発動した。

ランプリング・ジエノサイド
「魔王狂乱……」

ふざけたスピードでルフを斬り付け、あろうことか空高く投げ飛ばした。僕の間には無い。他の何者かが僕を操っているかのようだった。意識はあるが体が動かない僕。自分自身何をしているかが分からなかった。

そして空高く投げ飛ばしたルフを、斬る、斬る、斬る！！音速と言っても過言でない位のスピードで斬り付ける。まずもって、このスピードで行動しているのに、僕の体が無事だと言う事が不思議だ。しかし、今はそんな事はどうでも良かった。僕は目の前で、僕自身に斬りつけられ死んで逝くルフの姿をただ見ている事しかできなかった。そしてついに、僕はルフの翼を切り落とし、心臓

を刻み、首を刎ねた。そこで僕の攻撃が終わる。

ランブリングとはとりとめもなく話すと言う意味が有る。そしてジエノサイドは虐殺。つまり、この技の意味はとりとめもなく虐殺すると言う意味なのだろう。滅茶苦茶な技だ。何故発動したかは謎。ルフの死を確認すると、僕の体の自由が戻る。

……………なんだったんだ？

僕はそんな感じで疑問を持ちながら、頭に流れてくる戦闘結果を見た。

獲得経験値	∴	111111
ボーナス経験値	∴	000502
獲得金額	∴	038329
最大Hit数	∴	000052
戦闘時間	∴	3995.2
獲得ポイント	∴	000153
Lv24に上がった		
アイテム” 黒衣装 ” を拾った		
アイテム” シンプルな仮面 ” を拾った		
アイテム” 黒いブーツ ” を拾った		
アイテム” 見えない手枷 ” を拾った		
アイテム” 見えない足枷 ” を拾った		
アイテム” 魔剣騎士の証 ” を拾った		
スキル” 神界破壊 ” を習得した		
スキル” 神墮とし ” を習得した		
スキル” 魔皇狂乱 ” を習得した		

流石Lv50を倒しただけはある。レベルが一気に11も上がった。凄いな。

そんな事を思っていると、強制転移が発動し飛ばされた。

飛ばされた先にはリーデルトが立っていた。

「やあやあおめでとう。神獣に勝ったみたいだね！」

拍手をしながら笑顔でリーデルトは話す。

ウゼエ、人の苦勞も知らないで。

「まあこれで、君は魔劍騎士ジェノサイダーに転職が出来るようになった」

「そうかい。だったら早くしてくれ」

僕はそう言いながら魔劍騎士の証をリーデルトに渡す。恐らく、これを使う事になるだろうから。

「おや、此方が言う前に出してくれたね。うんうん、関心関心」

リーデルトはそう言いながらそのに何かを書き破り捨てた。その瞬間、紙から黒い影が出てきて僕を包んだ。

「！？ なんだこれは！」

「何だつて、転職に決まっているじゃないか」

リーデルトは落ちついた表情でそう言う。そしてもう一言。

「君の場合は特殊なんだけどね」

そう言つて、リーデルトは哀れみの目を向ける。

「特殊？」

僕がそう疑問に思う。しかしその疑問をリーデルトに尋ねる前に、それは始まった。

過去への干渉を開始します

「！？ どの言う事だ！」

僕の問いにリーデルトは答えない。ただ哀れみの目を向けながら笑っているだけ。

代償として、今までの記憶の消去を開始します

記憶を消すだと！ フザケルナ！ 僕の記憶が消されると！

「リーデルト！ 貴様これを知ってたな！！」

「ああ、勿論だよ。蒼月」

「リーイイデルトオオオオオオオ！！！！！！」

僕はそう叫びながら、どんどん薄れていく意識を保っていた。

「君は、今から永遠の放浪者として、この世界を旅し続けるのだよ。この世界を良い方向に導くよう、見守ってもらおう」

意識が途切れると同時に、僕は全てを失った。

そのまま僕は過去に送られた。

3

何も無い荒野。僕はそこで目を覚ました。何も分からない。

「……………僕は…！？」

意識が完全に覚醒した瞬間に、僕の頭に大量の情報が流れ込んでくる。名前や職業、この世界の事等多くの事が頭に入ってくる。道具の使い方、覚えているスキル等どんどん頭に入って行く。そして10分程立つと、全てが終わった。

魔法煙草が何故無限なのかは分からないが、とりあえず魔法煙草を取り出し火を付ける。

「……………ふう…。僕はどうすればいいんだ？」

率直な疑問。しかし、与えられた使命はこの世界を見護れと言う事だけ。魔法煙草無限は多分、ボクに使命を与えた人がくれたのだろう。

僕はそんな事を思いながら、一人荒野を歩いた。いくら見まわしても、荒野にいるのは僕一人。ただただ、歩いていくだけだった。

魔剣騎士（ジェノサイダー）（後書き）

「Hoor hath a secret」と書いた一文は、嘘の書の「ホークの叫び」(THE CRY OF THE HAWK)「より。」

メンテナンス（小説筆記）を開始します。

始まりの日（前書き）

システム（小説）の更新完了。

始まりの日

1

あれから800年が経った。荒野だった場所には大都市が出来た。森もだいぶ少なくなり、荒野と呼べる場所はほとんどなくなった。僕はあの時の姿のまま、今を生き続けている。400年前の悪魔狩りの時は何度拷問にかけられたぶられた事か。今思うと嫌な思い出ばかりだ。

何百、何千と戦った。強者だろうが弱者だろうが、敵意を持って太刀向かってきたモノは全て葬り去った。レベルの上がり悪く、今でやっとLv81だ。多くの戦いをしてきて、やはり強者だった者は弱者に変わり、僕以上の強者が現れる事が無くなった。しかし、ステータスは大分上がった。

シエオル・アイン・ソフ Lv81

職業

シエノサイダー

魔剣騎士

ステータス

体力：4811

魔力：2466

突き：786

斬り：1651

魔法：778

防御：335

対魔：348

技量：455

回避：470

速度：1524

命中：457

特殊スキル

虐殺（LV5）：敵を倒すたびに攻撃力大幅アップ。

狂人化（LV5）：MPを半分消費しそのバトル中の攻撃力を4倍にする。

黒魔術（LV5）：体力を大幅に回復していく。

12本の魔皇剣：装備している魔皇剣の力を上げるスキル。12の効果の内望んだモノを出せる。スキルレベルはない。

習得スキル

死刑執行（LV5）：1/3の確率で一撃必殺。

山斬一閃（LV5）：遠くにいる相手に斬撃を飛ばす。

虐殺行為（LV5）：周囲にいる敵に斬撃を浴びせる。

狂剣乱舞（LV5）：連続して20回の強攻撃を相手に当てる。

魔剣召喚（LV5）：攻撃力を10分間1.5倍にする。

転真乱刃（LV5）：基本ダメージが半分になるが、回避不可の40連撃を与えられる。

神界破壊（LV5）：渾身の一撃を相手に与える。

神墮とし（LV5）：一瞬で相手を一閃する強攻撃。

魔皇狂乱（LV5）：圧倒的なスピードで敵を何十回も斬り付ける乱舞攻撃。

破天暗風（LV5）：神墮としの強化版。

魔神神罰（LV5）：虐殺行為の強化版。

呪黒滅殺（LV5）：相手の魔法を完全吸収し、攻撃力を1.5倍にする。

地獄降誕（LV5）：周囲にいる敵に、圧倒的なダメージを与える。

狂乱獄殺（LV5）：魔皇狂乱の強化版。

無限獄殺（LV5）：結界を作り出し圧倒的スピードと圧倒的破壊力で肉体的、精神的に一撃必殺級のダメージを与える。

習得魔法

小炎 (LV1) … マッチより少し大きい位の火を出す。

小水 (LV1) … 300m位の水を出す。

呪炎 (LV1) … 黒い炎を作り、敵を焼き殺す。

黒風一迅 (LV5) … 移動速度を極限まで上げる魔法。

黒翼疾風 (LV5) … 空中を移動可能にし、移動速度を上げる魔法。

法。

瞬迅移動 … 一瞬で一度行った街に転移する魔法。魔法レ

ベルはない。

ポイント

1600

装備

魔皇剣(取り外し不可)

黒衣装(取り外し不可)

黒いブーツ(取り外し不可)

見えない手枷(取り外し不可)

見えない足枷(取り外し不可)

真黒のローブ(取り外し不可)

黒金剛石の十字架指輪

所持金

39729ギル

所持アイテム

低反発枕

HP回復薬(大) x200

MP回復薬(大) x200

魔法煙草 x

シンプルな仮面

こんな感じになっている。僕も長い年月を生きてきた。正直この世界にも飽きが来たのだ。何にも変わる事はない。世界に何かあつ

た場合は、僕の直感が何かを感じるらしいが、そんな物は一度も無い。今日もまた、淡々と一日を過ごしていくのだろう。

僕はそう思いながらベットに座る。勿論、煙草には火を付けている。そんな感じで昼まで僕は煙草を吸っては横になり、また吸っては横になりと、グータラ生活を続けていた。

そんなこんなで時間は13時48分。僕はついに、ついに何かを感じた！ 何かが始まる予感を。

「これは……ハイディンディートからか！」

僕はベットから起き上がり、瞬迅移動を使いハイディンディートまで転移した。

2

東方最大都市〈帝都・ハイディンディート〉

頭に情報が流れ込んでくるが、無視し何かを感じた場所まで移動した。するとそこには人だかりが出来ていた。

「……今から何かあるのか？」

僕は一人の男性に尋ねる。

「おいおい、あんちゃんも知らないのかよ。今から此処に葵様が来るんだよ」

「葵様？ …………… ああ、あの神導寺家の御令嬢か」

神導寺家。この世界にいる七貴族の内、一番支持率の高い貴族か。

「しかも、今日はメイド達とメイド長の朔夜様も来るらしいしよ」

「何よ！ メイドメイドって！ 執事長の裂夜様が一番よ！」

「だからオカマは黙ってる！」

何やら口論を始めた二人。成程、貴族様が来るならこの人だかりもおかしくはない。しかし、こんな場所からでは見えたモノじゃないな。

僕はそう思い、近くに会った家の屋根に上り、そこから見る事にした。何かがある、僕の勘がそう言っている。

煙草に火を付け暫く待つ。すると、下にいた人達が騒ぎだした。どうやら貴族様の登場のようだ。

「ほう、これは結構なイケメンと美人が二人か」

全く、嫉ましいね。まあどうでもいいけれど。800年も生きていれば人に好意を抱くと言う感情は皆無といっても過言じゃない。嫌悪ははするが。

だがそんな事はどうでも良い。問題は僕の勘が彼ら三人が怪しいと言っているところだ。

「やあ、どうです彼等は？」

僕の横に一人の男が現れ話しかける。

「……リーデルトか。で、どうですとはどういう意味だ？」

「いやあね、彼等がこの世界の命運を担う存在の一片なんですよ」

「!?!? ……ほう、それは面白い」

僕はにやりと笑いながら、魔皇剣の柄に手をかける。

「ギョ!?!? ちょっと待った! 何する気? え? 攻撃するの?」

馬鹿なの? 無知なの? 間抜けなの?」

その言葉を聞いた僕は、リーデルトの首に魔皇剣を向ける。

「……………殺すぞ、悠久の旅商人」

「ごめんなさい!」

リーデルトは即座に謝る。僕はそれを聞き魔皇剣を鞘に納める。

「全く、冗談位笑って流してくれば良いのに」

「フンッ、お前の冗談は笑えないんだよ」

「酷くないかそれ…。まあ良いや。そんな事より、今日会いに来たのは彼等の事さ」

そう言ってリーデルトは三人を指差す。

「……………厄介事か?」

「まあそうかも。でも、君にとっては良い厄介事かもしれないよ」

良い厄介事? 厄介事に良いは無いと思うが。

「君は公の場で彼等に攻撃しようとしたのがいけないのさ。彼等は今日中にこの街をでる。街を出てしばらくしたところで襲撃してくればいい」

成程成程、つまり実力を測れと言う事だな。

「承知した。これも僕の運命ならば、僕はそれに抗うつもりはない」「うんうん、ますますそのキャラが定着してきたね」

「黙れ！ お前がこうしろと言ったのだろ！」

全く、何か気取ったキャラをしてくれなんて言われて2000年。慣れとは恐ろしいものだな。

「まあまあ、そう目くじらを立てずに。それに、元のキャラはもっと酷かったじゃないか。後今回の運命は、それなりに楽しみでしょ？」

リーデルトはそう言って僕に微笑む。僕は魔法煙草に火を付け、それを吸い一言。

「全く、最高の親友を持ったよ僕は」

煙草を吸いながら立ち上がる。そして三人を見ながら魔皇剣の柄に手を載せる。

僕の使命はこの身体が消えない限り、この世界を見守って行く事。リーデルトもまた僕と同じような存在らしい。

「……………ふう……………全滅といったところかな？」

「クスクスクス、穏やかじゃないねえ。まあ別に良いけど。あの三人が半殺しても生きているなら他の有象無象はどうでも良いから」

おや、女好きのリーデルトがメイドの団体さんもどうでも良いと言っただなんて、これは明日は嵐か……………いや、世界が終るな。

「オイコラ！ 今失礼な事を考えているだろ！」

「??? いや、別に。女好きのお前が、メイドの団体を有象無象と言ったから明日で世界が終るとかは考えていないぞ」

「まんま口に出したよこの人！ それに！ メイドの団体様を私がほっとく訳無いだろうが！」

……………成程、その辺はぬかりないと言う事か。

「じゃあ、僕が徹底的に殺しにかかっても、あの三人が生きていればいいと言う事だね」

「うん。他はどうでも良いから。それに、あの三人も撮るに足りない存在だと分かったら、彼らには死んで逝ってもらうからね」

「フツ、結局は生きて逝くだろ」

「おつ、そうだったね」

僕たちは会話を交えながら三人の行動を見続けた。

おや、煙草が…。

僕は再び新しい煙草に火を付ける。

「……昔から思っていたんだけど、シエオルって結構ヘビースモーカーだよな」

「ん？ そうか？ まあ身体にも良いし、香りも良い魔法煙草だ。

別に問題ないだろ」

「いやまあそうだけどさ。魔法煙草じゃなかったら私がぶちのめしていた所だよ」

「フンツ、普通の煙草を吸う奴は只の死にたがりだよ。あんな体に悪い成分しかないモノを吸うなんて」

「同感だね。しかも吐き出す煙も危険だし良い事なしだよ」

まあ魔法煙草は高いからな。僕は無限に持っているけど、他の人からしたら結構な高級品だからな。普通の煙草が1箱30ギルとしたら、魔法煙草は1箱3000ギルだ。まあ僕から言わせてみればどうでも良いんだけど。

「さてと、私は行くとするよ」

「そうか。じゃあさようならだ」

リーデルトは手を振りながら僕の目の前から消えた。さてと、僕も行くとするかな。目標の三人もそろそろ街を出るみたいだし。

「黒翼疾風」

魔法を発動し空に浮かぶ。そして僕は三人を追った。

「!?!? 強制転移だ?!?!?」

あの後、三人の後を追い空を飛んでいたのだが突然転移をさせられた。街から少し行った場所のようだ。

「……で、君達は何なのかな?」

僕はそう言い後ろを向く。すると白い服を着た御一行が現れる。

その瞬間、BGMが変わった。

『我等、唯一絶対神に使わされし、罪深き使徒なり』

『我等は主の変わりに罰を、神罰を与えるために遣わされた使徒なり』

『我等の手に持つは罪人を裁く御神のモノ』

『我等徒党を組んで下界へと今舞い降りた!』

『ならば我等罪人裁くため方陣を敷き、悪意に満ちた愚者を裁かん!』

白服の御一行はそう言うと、僕に攻撃を開始した。硝子の砕ける音と共に、戦闘が始まった。

始まりの日（後書き）

メンテナンス（小説筆記）を開始します。

白教会 ～奥儀解放～（前書き）

システム（小説）の更新完了。

白教会　　～奥儀解放～

1

～白協会の見習い神父～　L V 6 7　x 7

頭の中に相手の情報が入ってくる。白協会？　聞いた事が無い。
今までかなりの年月生きてきたが、こんな相手は初めてだ。

「ふむ、些か面倒だね」

魔法煙草に火を付け加える。

「天の獄へと葬ってやろう！

地獄降誕！！」

攻撃を開始する。その瞬間、僕の周りの地面が裂け、業火が噴き出す。しかし奴らは、それを物ともせず攻撃を開始してくる。

『汝の意志することを行え、それが法の全てとなろう。』

この書を学ぶことは禁じられている。

最初に読んだ後に破棄する事が賢明である。

これを無視する者は自らを冒険と危険に晒すものだ。

これらは最も恐ろしいものである。

本書の内容について議論する者は害悪の中心であるが、
如く皆に避けられる者となろう。

法に関する全ての質問は、

わが著作への懇請によつてのみ決定される。

それぞれが自分自身の為に。

「汝の意志する事を行え」を超える法はない。

愛は法なり、意志の下の愛こそが。

王子らの司祭。

ANKH - F - N - KHONSU 『

奴らが唱え終わると、強制的に地獄降誕が終了される。少しの驚

きと、多大な歓喜が僕を襲う。

長く生きてきたが僕の技を途中で止める輩等、本当に久しぶりだ！ 楽しい！ 楽しいぞ！

僕がそんな事を思っていると、奴らは次の行動を開始する。

「他にしていた彼ら(5)」

「なしは、その数は六である彼らです」

「確かに六」

「セブン(6)は、市ではない生きてこれらの6つです」

「パンの夜の下にピラミッド」

「老子があつた」

「Siddarthaがあつた」

「クリシュナがあつた」

「Tahutiがあつた」

「Moshahがあつた」

「ディオニソスがあつた。(7)」

「そこではマフムードだった」

「しかし、七人がPERDURABOと呼ばれる」

「ため最後に、エンドわたしに耐えて無された」

「我慢する。(8)」

「Amen！」

全員で一つの詠唱を完成させ、技を発動させる。白い龍の形をした衝撃波が僕を襲う。轟音と共に放たれた龍は、僕を追いかけまわし喰らわんとする勢いで突っ込んでくる。

おいおい、こんなものが当たったらシャレにならないね。少しダメージを受けたのか、僕のHPが約4000まで減っていた。対する相手のHPは平均で12000。流石にこれが七体と言うのは、生半可の攻撃をしたら此方の死を意味しかねない。だから

「狂乱獄殺！」

僕は使える技の中でも、かなり高威力な技を発動した。技が発動すると相手のHPは見る見る中に減って行く。一体、また一体と倒

していく。しかし

『我等神罰下すまで、

我等の存在永久に不滅!』

そう言いました新しい敵が現れる

「クツ、切りが無いな」

倒しても倒しても沸いて来るんじゃない意味が無い。

僕はそう思いながら、敵を倒し続ける。すると頭の中に情報が流れ込んでくる。

～奥儀オーバースキルが解放されました～

奥儀だと？ 何だそれは？

～奥儀の使用条件はMPの下に追加されたEXのゲージが2/3以上ある時です～

EXゲージ？ 何だそれは？ 確かに追加されている。初回だからと言う訳で、MAXになっている。

～EXゲージの増加条件は敵を攻撃した時、ダメージを受けた時、敵を倒した時、レベルがアップした時です～

そこまで情報を流すと、もう無いらしく情報が流れて来なくなつた。

「……これは奥儀を使わないと倒せないのかな？ 全く、リーデルトめ……僕で遊んでいるな」

今までも何度か特定のスキルを使わないと倒せない敵などが居た。その全てがリーデルトの差し向け。今回もその類いなのだろう。敵はともかく、こういった条件を付けれる存在はリーデルト以外いない。

はあ……、ならさっさと終わらせるか。

僕はそう思いながら、奥儀を発動した。詠唱ややり方は習得した時に頭に流れ込んできた。

「有象無象は全て消える！

魔皇剣！ 一号解放！

第一斬魔皇剣・テイルヴィング！」

白銀の刃に黒い電子回路の線の様な物が入っている。重さは普通の剣と変わらない。

僕の奥儀が発動する。無数に沸いて来る敵を斬り倒していく。一匹に付き三回ずつ。しかも、絶対に急所となる場所の三か所だ。頭、首、胸の三か所にのみ攻撃が行く。そしてダメージが上に表記される。計50000の三回攻撃。

「!? 50kの三回攻撃だ!?」

ちなみにkとは1k=1000の計算だ。僕の記憶にあった数字の単位の一つである。

2

最後と思われる一匹の止めを刺そうとする。

「まあ、運が無かったと思うんだね。いくら数を集めようと、有象無象じゃ意味が無い」

僕がそう言うと、敵が口を開く。

「我等、白協会は不滅！ 我等、白協会第13支部は白協会がある限り不滅！」

そう言うと敵は死に、アイテムを落とす。

獲得経験値	∴	469211
ボーナス経験値	∴	000214
獲得金額	∴	034431
最大Hit数	∴	000214
戦闘時間	∴	0932.1
獲得ポイント	∴	000023
Lv83に上がった		
アイテム”白いコート”		を40着拾った

アイテム”白協会の聖書”を40冊拾った
アイテム”白魔導書”を拾った
アイテム”嘘の書の切れ端”を拾った
ステータスにEXゲージが追加された

ふむ、このレベルで一気に2レベル上がるとは。まあ49体倒したんだ。それくらいが妥当だろう。

そんな事を思っていると、BGMが変わる。

「やあやあ、奥儀を解放したみたいだね」

リーデルトが現れ話しかけてくる。

「やはり君の差し向けだったか。また何故こんな事を？」

煙草に火をつけながら、リーデルトに問う。

「うーん、この白協会なんだけど……他の世界からの使者何だよ。

それも、侵略しようとするやから」

「ほう、それはまた興味深い。成程、だから今まで見た事が無い技を発動させたりしていたのか」

「うん。それに侵略してくるのは全員パラディン系統の職業だって言う事も分かっているんだ。そして奴らはエグゼキューションナー系統の職業を異常なまでに敵視している。だから丁度良かったんだ。君の奥儀解放イベントにね」

いや、最初から説明してくれば普通に行っていたのだが。まあ、事態が事態だから仕方が無いか。

「しかし、おかしくないか」

「ん？ 何が？」

「いや、何がって……この間リーデルトが話していた多元世界直接干渉不可の法則と、多元疑似世界完全干渉不可の法則に」

多元世界直接干渉不可の法則とは、例えば他の世界が有ったとする。それに干渉するにはアニメやゲームなどを作り、それに似た世界を作り出し干渉する方法しかないと言う物。本物の多元世界に干渉するのは、それぞれの世界が発動している大結界を破壊するしか

ない。しかし、それは神ですら不可能な事。ましてや人間にそれが出来る訳が無いと言うもの。

つまり、直接干渉は無理だけど、似たものを作ってそれを動かす事は出来るよって言う法則らしい。

そしてもう一つ、多元疑似世界完全干渉不可の法則について。この法則はその世界に似た世界があったり作られたりした場合、それらの世界が干渉する事、観測する事は不可能と言うものだ。つまり、一人プレイのゲームが有るとする。そしてそれをA君とB君が持っている。A君のプレイするゲームに、B君が作り上げたキャラクタ―を登場させる事は不可能。それがこの法則だ。

ちなみに、オンラインゲームはその世界ごとに結界は発動しているが、オンラインにした時に大結界が一時的に消滅するので干渉が出来るのだ。しかしそのためハッキングなどの干渉を受ける事になる。

「確かに、私の言っている理論とは違う。だからこそ、君に差し向けたんだ。でも、駄目だった。裏で何か大きい力……神すら凌駕する力が動いている事は確かなんだけど……」

神を凌駕するだと！？ そんな馬鹿な事が！？

「神は人の想像が生み出した最高にして最悪の力だぞ！？ 実態が無く、ただ信仰されているだけで世界を滅ぼしかねない力を持った意識の集合体だぞ！？ そんな馬鹿げたもの以上の力だど！？」

「うん、その通りさ。神は知識を持った生物が生み出した最強の力。でも、それ以上の力が働いているんだよ。疑似世界が結界を無理やりこじ開けて干渉すると言う事は」

そんな事は……あり得ない。あつてはならない事なのに……。

「まあ、神と言う存在を無意識の内にも作らずに自らを最高の力を持つっていると信じ続け、かつパラレルワールドに関する理論を完全に解き明かし、そして他の世界線に干渉するための機械か何かを完全に作り出せる奴が居れば別だけど」

「ちよつと待て、世界線だと!？」

「そう、世界線さ。疑似世界は大元となる世界の誕生が必要。そしてその世界はその世界がたどるであろう可能性の分だけ世界線を増やしていく。それこそ、無限大にね。そして無限大にIFの世界を作り続けるのさ。この世界もその一つかもしれないし、もしかしたら大元の世界かもしれない」

「……」

言葉が出ない。もしかしたらこの世界そのものが作られた疑似世界かもしれないと言っているからだ。

「世界線はそのパラレルワールドを観測した別の世界の人間が創り出したゲームやアニメなどでも、新しい世界線が増える。だからその増えはとどまる事を知らないんだ」

「………成程、言っている事はなんとなくわかった。しかし、そんな物を可能にする人間が居るのか？」

そう、例え理論が分かったとしてもその機械が作れなければ意味が無い。逆に機械が作れても理論が分かっているなければそれも意味が無い。それら両方が分かっている、もしくは片方ずつ分かっている者が居る状態じゃないと、世界線に干渉し別の世界、そして特定のパラレルワールドに侵略を仕掛けるなど無理だ。

まさか、僕が戦った相手は、とんでもない相手だったなんてね。

流石にこれは驚いた。

「ちなみに、彼等がこの世界のIFの世界の未来人の可能性もあるんだよ」

「フン、そこまで無知じゃないよ僕は。時間線だろ？ 世界線と同じように伸び、同じように分岐し、また同じように伸びていく。世界線のたどっている経路通りに」

時間線。それは簡単に言うとな時間の事だ。世界線が大元の所からまっすぐに伸び、その内の一本の分岐が出来る。すると時間線も一本の分岐を作る。つまり、世界線の進む経路⇨時間線の進む経路と
言う訳だ。

「で、その何処かのパラレルワールドの天才馬鹿とその雑兵どもが、この世界の世界線に干渉し侵略を行おうと言う訳だろ？」

「うん、君はやはり理解が早い。そう言う所は好きだよ（笑）」

「勘弁してくれ。僕はそういった趣味はない」

「私もだよ！？ この世の全ての15歳未満の少女たちは私の妹！
10歳未満なら少年だつて僕の妹！」

「ウワア、変態だー（棒読み）」

「フッフ、今さらだろ？」

まあ、あつて間もないころはとんでもなかったからな。街に行くたびに現れ、何か話し終わると女性に声をかける。そして無視された時に

「三次元に興味を持った私が馬鹿ですた…」

とか

「私の嫁は此処に！」

とか言つて痛い感じの絵が入った抱き枕を持っていたり…。挙句の果てには

「キターー！！ あそこにいる幼女、私が今やっているゲームのヒロインのユリさんに似ているんですけど！ ちょく萌えく！ ユリたんハアハア…。お持ち帰りしても良いかな？」

「ダメに決まっているだろ！ この変態が！」

というやり取りもした覚えがある。

「でも、君の厨二病もマシになった方でしょ」

「厨二病？ 何の事だい？」

「いや、あつて間もないころ」

3

今からさかのぼる事500年前のシエオル。

「おや、リーデルトじゃないか。どうしたんだい？」

「ん？ いや特に用は……」

「そうか……、なら、今日は良い事を教えてやろう」

「良い事？」

「そうだ。見るこの術式を！」

そう言つてシエオルは曼荼羅模様が何十と重なつた魔法陣を見せる。

「ほう、シエオルが作ったのかい？」

「そうだ！ この術式……名付けて！ 断罪術式・祭壇自己犠牲！」

「……………（名前が痛いなあ……。いや、この世界のスキルや術も名前が痛いけど……………、此処までとは……）」

「他にも見てくれ」

そう言いシエオルは他の魔法陣を持つてくる。

「こつちは墮天術式・呪縛されし黒き翼！^{ウィングルシフェル}そしてこつちが邪眼術式・見者必殺！」^{イヴィルアイ}

痛い、痛いよシエオル。私には君のキャラが分からない……。

「で、これが一番の自信作、鎮魂術式・虐殺終焉の襖」^{レクイエム}^{ジ・エンド}

……………これは痛すぎる。一体何をしたらこんな事になったんだ。フッフ、凄いだろ？ 凄過ぎて言葉が出ないみたいだね。まあ仕方が無いよ。全てはこうなる運命^{さだめ}なのさ。僕がこの術式を生みだすのも神の定めし運命と言う翼の一枚の羽根。僕がそれを手に乗せただけの事だ。まあ僕が手にその羽根を乗せると言う運命も、また神の定めた運命だと言う訳だ」

「……………厨二病……乙……」

この言葉以外見つからなかった。

「こんなことでいちいち節を切り替えるな」

「まあ良いじゃないの。まあ今思い出しても、痛いねえ……」

「痛い？ 何を言っているんだ君は？ 素晴らしいセンスじゃないか。虐殺終焉の楔と書き、ジ・エンドと読むなど……やはり神は僕にすばらしいネーミングセンスを与えてくださったようだ」

「まだ治ってないの!？」

「黙れ！ 君の変態も治っていないじゃないか！」

こんな感じで言い争う。暫く言い争っていると、本来の目的を思い出す僕。

「オツと、こんな事をしている場合じゃないんだ。僕には行く場所があるから……行かせていただくよ」

そう言って僕は黒翼疾風を発動させる。そしてその場から去った。

白教会 ～奥儀解放～（後書き）

「汝の意志することを」と書いた一文は、法の書の注釈より。

「他にしていた彼ら（5）」から始まる文は、嘘の書の「恐竜（THE DINOSAURS）」より。

メンテナンス（小説筆記）を開始します。

接触、そして（前書き）

システム（小説）の更新完了

接触、そして

1

街を出て暫く行ったところで、僕は三人を襲撃する事にした。魔法煙草を吸いながら三人が来るのを待つ。他のモノは殺しても良いと言う事だったから、容赦はしない。最初から、殺す気で掛かる。そんな事を思っていると、遠くに影が見えてきた。僕は魔皇剣の柄に手を置き、シンプルな仮面を付けその場で待つ。そして、姿が完全に確認できた瞬間に、行動を開始した。

「山斬一閃：！」

爆発音とともに、三人の前にいた従者たちが吹き飛ぶ。慌てふためいた表情を見せる奴ら。

全く、ぬるいな。こんな奴を倒す為に僕を仕向けただと。リーダートめ、期待させておいてなんだこれは。

「貴様！ 何者だ！」

執事の一人が僕に怒鳴り、周りの執事と共に剣を向ける。

ほう、僕に剣を向けるか。なら、死んでも文句は言えないな。

ブラッディ・レイド
「破天暗風：！」

一瞬でその執事の後ろに行き、抜いた魔皇剣を鞘に納める。そして腕を上げ、指を鳴らす。

地面に何かが落ちる音と共に、赤い雨が降り注ぐ。

「どんなに頑張ろうと、所詮人間はこの程度なのさ」

上半身と下半身が離れ倒れて死んでいる執事の一人の頭を踏みつけ、あざ笑つ。

「！？ き、貴様！」

一人の執事は激怒し、僕に向かってくる。他の者は僕に脅えているのか、剣を持ったまま立ちすくんでいる。

「貴様は！ 貴様は！ 貴様は！」

何が言いたいのか分からない。恐らくこの執事にとって、さつき殺した執事は肉親の様な存在だったのだろう。だから激怒し剣を振るう。全く、精神が脆い。そのせいで

「死ぬのに……」

僕は持ち前のスピードで相手の後ろに回り込み、心臓めがけ魔皇剣を振るう。

「！？ ガア！！」

しかし心臓から外れ、右の肺に突き刺さる。

「おや、外してしまったか。まあ良い。そのまま死ぬ」

僕はそう言い、ぐりぐりと剣を回しながら引き抜く。そしてその執事を蹴り飛ばす。心臓では無いので苦しんで死ぬ事になるだろうが、知った事では無い。

「さあ、次は誰だ？ 一人で無理なら集団で来い。兵法の基本は相手より数が多い事だろ？ 君達は僕一人に勝てないのかい？」

僕が此処まで言うに残りの執事の半分、大体十五人位が剣を向ける。

ふむ、面白いなこいつ等。メイドに戦わせまいと自らが前に出て、メイドには出るなと言っている。そう言う下らないプライドが、命を落とすと言うのに。いや、これがリーデルトの仕組んだ事なのか？

イヤまさかな。いくらあいつでも、人の心を操る事は出来ない……ハズだ。

僕がそんな事を考えていると、執事たちは斬りかかってくる。

「虐殺行為」

周りにいた執事が僕の攻撃で刻まれる。

「兵法の基本は完璧だったみたいだが、それ以前に力の差が大きかったようだな。すまないな、僕が強すぎて」

どこのナルシストだと言われてもおかしくないセリフを吐くが、この場にいた者の殆どが恐怖した。圧倒的な僕と言う存在に。しかしそんな中、一人が声を上げる。

「もう我慢出来ん！俺の眼前で仲間が死ぬ事は！」

「…………… 執事長、五月雨 裂夜」

「私もいるわよ化物！」

「今度はメイド長の五月雨 朔夜か」

「いや、従者がやられているのに黙っている主もいないのよ」

「フツ、神導寺 葵」

これはターゲットの三人がいつぺんに出てきてくれた。すばらしい、実にすばらしい。今さっきの虐殺を見てもなお、太刀向かってくるとは！ 度胸だけは合格と言ったところかな？ 他はまだ未知数だが。

僕がそう思っていると硝子の割れたような音と共に、音楽が変わる。戦闘の合図だ。

「神導寺家執事長、五月雨裂夜！ いざゆかん！」

「神導寺家メイド長、五月雨朔夜！ いきますわ！」

「神導寺家次期頭首、神導寺葵！ いくわよ！」

名乗りから始めるか。なら僕も名乗らなければな。

「悠久の傍観者、シエオル・アイン・ソフ…… 虐殺の開始だ」

僕はそう言っつて鞘に納めた魔王剣を再び抜いた。ちなみに、悠久の傍観者とはリーデルトが付けてくれたものだ。

2

「どうした？ 三人がかりでこの程度なのか？」

僕は魔王剣で三人の攻撃を軽くあしらう。

「クツ！ 俺の鋼系が通用しないだと！？」

「私のナイフが当たらないなんて！？」

「二人のサポートが追いつかない！」

残念だ、期待した僕が馬鹿だった。度胸以外は最悪。雑魚にも程

がある。

そう言えば、従者の二人は職業の特性で従者のダメージを変わりに負うらしいな。なら、あの神導寺の御令嬢を狙う事にするか。

僕はそう思い神導寺の御令嬢目掛け、スキルを発動する。

「転真乱刃」

一瞬で間合いを詰め、僕は御令嬢に斬りかかった。斬って斬って斬って斬って斬って斬って斬って斬り続ける。見た感じ御令嬢にはダメージが無い様だが、二人の従者にはダメージが有るらしい。まあ御令嬢に関しては精神的にダメージを受けているようだが。

「ハハハ！ ハハハハハハハハハ！」

狂ったように笑いながら40連撃を決める。連撃が終わると、二人の従者は膝をついて肩で息をしている。大分ダメージを受けたようだ。

「何で……」

御令嬢が静かに声を漏らす。

「何でこんなことするのよ！」

「……………こいつはどうしようもないバカだ。リーデルトの言う通りなら、此処で排除しておかなければ世界は終わる。」

「うゝむ、もう少しやってくれと思うただけどねえ」

「『！？！？！？！？！』」

「……………リーデルト、これはいったいどう言う事だ！ 弱いにもほどがあるぞ！」

突如現れたリーデルトに僕は怒鳴る。リーデルトはやれやれと言った感じで首を振りながら近づいて来る。

「リーデルトさん！？ こいつと知り合いなの！？」

御令嬢が僕を見る。リーデルトはその言葉に頷き、僕に肩を組んでくる。

「御名答！ 僕とこいつは親友さ！」

僕はリーデルトをひきはがし、三人を見る。

「君達は弱い、弱すぎる。君達がこの世界の命運を背負うとなると

……… 実に、実に悲惨な結末を迎える」

「まあまあ、そう言っただけでやらない。君と彼らとじゃレベルが違い過ぎるんだから」

……… そう言えば奴らのレベルの情報が頭に流れ込んでこなかった。やはりこいつの仕業だったか。

「リーデルト！ あいつは何なんだ！ 何故俺達に攻撃してきた！」

「そうですね！ それに、執事が何人も殺されたのですよ！」

従者の二人はリーデルトに詰め寄り、怒りをあらわにする。

全く持って、無様だ。もう何も言えないね。

「ちよつとちよつと、そんなに怒らない怒らない。君達だつて何人も殺して来てるんだから」

「それは相手が殺す気で攻撃してきたからだ！」

「それに、私達だつて好きで殺しているわけではないのですの！」

好きで殺していたらもうそれは人間じゃない。人の皮をかぶった化物。いや、人間から進化した新たな生物と言うものかな？

「だから落ちついて！ それと、シエオルもいつまでそんな仮面を付けているのさ！」

「……… 外していいのか？」

「誰も付けると言っただけだよ」

そうか、なら外そう。このままじゃ煙草が吸えん。

僕はそう思いながら仮面を外す。そして煙草を加え火を付ける。

「ふう………？ なんだ、人の顔をじろじろと」

僕が仮面を外してから、三人は驚愕の表情を現し、僕の顔を見ている。

はて？ 僕の顔はそんなにショッキングなのかな？ 別に大きな傷跡とかが有るわけではないのに。

「……… そうよね、人違いよね」

「そうだ、そうに決まっている」

「………」

……… ますます分からん。僕に似た知り合いでもいるのか彼等は

？ いや、そんな事はどうでも良い。

「おっと、忘れるところだった。君達全員に敵対していた奴のレベルの情報を流すよ」

リーデルトがそう言うのと頭の中に情報が浮かんでくる。

～五月雨裂夜～ L V 2 6

～五月雨朔夜～ L V 2 5

～神導寺葵～ L V 2 6

…………… 成程、OK。これじゃ話にならない訳だ。向こうも向こうで僕のレベルを知り驚愕しているようだ。まあ無理もないだろう。約57位レベルが違う相手に太刀向かっていたのだから。

ではなぜリーデルトは僕を彼等に仕向けたのか？ 経験を積みさせる？ それはないな。ならなんだ？

「うんうん、良い感じに困惑してくれて」

「良いから話せ、すぐさま話せ。さもなければ首が飛ぶぞ」

「分かった！ 分かったから！ 早く剣を鞘に納めて！」
本気で焦っているリーデルトを見て僕はゆっくりと剣を鞘に納める。

「全く、すぐ首に剣を当てるのは君の悪い癖だよ…………… つとその前にリーデルトは手を高く挙げ、指を鳴らす。すると僕が殺した執事に、最上級治癒魔法のリヴァイヴ・ライフがかかり光に包まれ生き返る。

「うんうん、生き返らせとかないと君達の中がギクシャクするからね」

「どうでも良いと思うが。まあ、昔からリーデルトの考えは読めなかったから考える事は止めよう。」

「さてと、まず何で君達三人をシェオルと戦わせたかだね」

三人はほぼ同時に頷く。

ふざけた回答だったら殺す、必ず殺す。

「簡単に言えば、君達に知ってほしかったんだよ。本物の強者と言うモノを」

……僕が強者だと？ フンッ、笑わせてくれる。僕よりも遙かに強いモノは存在する。

「くだらんな。僕は帰るよ」

「まあまあ、ちよつと位聞いてつても良いじゃないか」

「五月蠅い。誰が何と言おうと僕は帰る。そして寝る」

僕はそう言い瞬迅移動を発動させようとした。しかし、発動が来ない。

リーデルトめ、僕の魔法を止めたな。

「チツ、どちらにしる聞いていかないと返さないって言う事だね？」

「うんうん、理解が早くて嬉しいよ！」

「黙れ！ こんな雑魚と戦わされた事で苛立っているんだ！ それに、天才馬鹿の雑兵の事でもだ！」

「だから、すぐに剣を首に向けなさいよ！ 私だって恐怖は感じるんだから！」

良く言う。まあ良い。そんな事より、話しを進めてもらう事にしよう。

僕はそう思い、魔皇剣を鞘に納める。

「ふう。でね、話と言うのはシエオル、君に三人のレベルを上げてもらいたいんだ」

……ハア？ このバカは何を言っている。三人のレベルを上げる？ 何故僕がそんな事を。それは経験値を吸わせると言う事か？

確かに、レベルの高い僕が、レベルの低い三人とチームを組み、レベルの高いモンスターを倒せばある程度経験値が割り振られる。しかし

「僕には得する要素がない。と言うより、寝る時間を割かれて損をする」

「うん…、確かにそうだね。ならばこつこつというのはどうだい？ 君の作った術式を使えるようにしてあげる」

「!? 何だと!? ならば断罪術式・祭壇自己犠牲サクリフェイスや邪眼術式・見者必殺イヴァルアイが使えと言う事か!？」

「う、うん。そうだよ。君のステータスに術式の覧を追加しておくから、それで良いでしょ？ まあ元々君が作った術式だからね。君が使わないと意味がないし。あ、でも、この世界に影響がないよう威力や効果の調整はさせてもらおうよ」

「ああ、構わない。ならば僕も君の行った役目を引き受けよう」
交換条件と言う事で、僕は三人のレベル上げを引き受ける事にした。

「じゃ、ちょっと待ってね…」

そう言うと、リーデルトはムムムと唸り、そして両手を上げて「イイツァアアアアアアアッハアアアアアアアアアアアアアアア！！！」と奇声を上げた。すると僕の頭の中に情報が流れ込んでくる。

↳ 特殊スキル、術式を解放しました

僕はステータスを確認し

レベルはありません
術式

断罪術式・祭壇自己犠牲

墮天術式・呪縛されし黒き翼

邪眼術式・見者必殺

鎮魂術式・虐殺終焉の楔

が追加されているのを確認した。

「ふむ、確かに。ならば僕も役目を果たそう」

「うんうん、ありがとう。私もサポートするから、よろしく」

リーデルトがそう言うのを聞くと、僕は三人の方を向く。
「明日の朝八時に、あそこに見える川明の森に来るんだ。異論は認めないよ、絶対にだ」

僕はそう言うと、三人の意見を聞かず瞬迅移動を発動する。そして僕はこの場から去った。

接触、そして（後書き）

メンテナンス（小説筆記）を開始します。

同業者と対立者（前書き）

システム（小説）の更新完了

同業者と対立者

1

後日私は三人とチームを組み、川明の森の前にいた。

「さあ、準備は良いね？ まあ、主に君達は立っているだけで良いのだけれど」

僕はそう言い、森へと足を踏み入れた。

光さす魔の森　川明の森

「シエオルさん。私達は何を？ 流石に立っているだけと言うのは…」

メイドがそう言う。しかし、この森のモンスターのレベルは30〜45。つまり、戦いの時には三人は足手まといでしかない。しかし、何かしないと恐らくは引き下がらないという顔をしている。

はあ…、面倒くさい。

「なら、僕が合図したらMPの回復をよろしく。後は後ろで徹底防戦していてくれればいいから」

僕はそう言うと、魔法煙草に火を付けモンスターを探しだした。

そして一分と経たないうちにモンスターが現れた。

硝子の割れる音と共にBGMが変更される。

　　〜マンドラコーラ　　Lv32　　x2

　　〜マンドラミネラル　Lv30　　x3

頭の中に情報が流れ込む。

さて、昨日手に入れた術式を使う事にしよう。

「さあ、まずは小手調べだ」

僕はそう言い、詠唱に入った。

「人は生がPenalty!

罪は罪、裁かれません。

何故なら汝は人だから。

死はO u t！ 生は間違い！

自らを傷つけ許しを請うな！

神はいない、H e l l yはこの世、

汝が怒りが滅ぼします。

未知は優秀、無知は天才。

死を得るのならS i l v e rナイフで心を護れ！

断罪術式・祭壇自己犠牲！」

僕は詠唱が終わると同時に、地面に魔皇剣を突き刺した。すると、モンスターを貫かんと地面から銀色の針が飛び出す。モンスターの最大H Pが3000(3k)。たいしてこの技のダメージが5000(5k)。つまりは一撃でモンスターが死ぬ。

B G Mが変わり、戦闘結果が頭の中に入ってくる。

獲得経験値	∴	003211
ボーナス経験値	∴	000008
獲得金額	∴	001532
最大H i t数	∴	000008
戦闘時間	∴	0010.2
獲得ポイント	∴	000001

五月雨 朔夜のレベルが26になりました。
アイテム”緑の炭酸飲料”を手に入れました。

戦闘結果が流れ終わり、再び辺りを散策する。

「あの、シエオルさんは今まで何をなされていたんだ？」

御令嬢が話しかけてくる。

今まで何をしていたか……ふむ…、難しいな。

「しいて言うなら、毎日魔法煙草を吸い、好きな時に寝て、好きな時に食べて、好きな時に身体を動かす、そんな感じの毎日を送っていたね。正直、生きた屍の様な生活だった。退屈すぎる。まあ今も

何だけど」

「じゃあ、何でそんなに強いんだ？」

今度は執事が質問をする。

何故強いのか。それも考えた事がなかった。

「ただ向かってくる敵を、返り討ちに行っているだけだ。それで勝手にレベルが上がって行き、スキルを覚えて行った。そんな所だ。何故強いのかは分からない」

僕がそう話していると、モンスターが現れた。

再び硝子が割れる音とBGMが変わる。

　　～マンドラクターペッパー～　Lv39　x2

　　～マンドラサイダー～　Lv35　x2

　　～マンドラムシュ～　Lv43　x1

頭の中に情報が流れ込むと同時に、僕は術式を発動した。

「墮天使はHeaven！　天使はHell！

墮ちるは正しき悪となり、

残るは悪しき善となった。

See, Look, Watch！

無駄なことは良い事だ！

無駄なきことは悪い事だ！

黒い羽は、自分は現します。

避けても避けても逃げられない自分を。

天使はいずれ悪魔になろう。

L - L - S - B - M - B - A

傲慢 - 嫉妬 - 憤怒 - 怠惰 - 強欲 - 食欲 - 性欲

貴方はどれかを選択を！

墮天術式・呪縛されし黒き翼！」

僕から黒い翼が生え、それが敵を覆うように展開される。

そして大量の剣、槍、鎚、銃等の武器が降り注いだ。見る見る中に削られていく敵のHP。そしてまたすぐに片が付いた。

再びBGMが変わり、戦闘結果が頭に入ってくる。

獲得経験値 …… 003571
ボーナスイ経験値 …… 000032
獲得金額 …… 001995
最大Hit数 …… 000032
戦闘時間 …… 0020.0
獲得ポイント …… 000001
アイテム”緑の炭酸飲料”を手に入れた。
アイテム”独特な味の緑の炭酸飲料”を手に入れた。
アイテム”緑のアルコール飲料”を手に入れた。

戦闘結果が終わり、また辺りを散策する。僕達はそれを繰り返した。

2

気付けばかなり時間が経っており、こちら辺のモンスターは粗方全滅させたような気がする。周りには、持ち切れなくなったアイテムが落ちている。三人のレベルも30になった。

「ふむ、今日はこれ位で良いかな？」

僕がそう三人に尋ねると、三人は勢い良く頷く。

「助かった。礼を言う」

「まさか今日一日で此処までレベルが上がるなんて、思ってもみませんでしたわ」

「ありがとう。もしよろしければ、今後もお願ひできないでしょうか？」

三人がそう言って頭を下げてくる。僕としては、術式が使えるようになったので、ある程度までは手伝うつもりだ。基本的にはLv

70位まで。だから、頭を下げられなくても、そこまではあげてやるつもりだった。

しかし、こうやって頼まれるのも少しくすぐったいような気がする。まあ、頭を下げられたからには、リーデルトからの任務を完璧に全うしてやらなければならない。

僕はそう思いながら、辺りを見まわした。するとそこには一人の少年が居た。

「さあ、君達は帰って自分のすべきことをするんだ。僕はこれから用事がある。これは街に行く転移符だ」

僕はそう言つて一枚の紙を渡した。三人は再び僕に頭を下げ、転移符を使いこの場から去った。

さて、僕はあの少年に話しかける事にしよう。

そう思い、その少年に僕は近付いた。

「!？」

僕が一瞬で近づいてきた事に驚き、少年は剣に手をかける。

「待つんだ。僕は君と争う気はない」

僕はそう言つて剣を納めさせる。そして、僕は少年を見た。

ほう、此処まで僕に似ている存在が居るとは。そしてこの雰囲気は……恐らく、エグゼキューションナーなのだろう。僕の勘がそう言っている。

「な……なな!？」

少年の方は驚きで声が出ないようだ。

まあ確かに、自分と瓜二つの者が現れて驚かない訳がない。

「ふむ、君は僕に似ているね。顔立ちも、職業も、そして運の無さもね」

もう少し話していたい。しかし、この嫌な感じは……敵が近付いてきている。

「あ、貴方は……」

少年は戸惑いながらも聞いて来る。

「僕? 僕は只の傍観者さ。力の強さより理から外されたモノ。君

なら分かると思うけど?」

僕はそう答えた。すると少年は少し考え込む。

これで分かった。彼がエグゼキューションだと言う事が。そして丁度その時、敵が姿を現した。

「うん、その顔は何か心当たりがある顔だね。でも…」

僕はそう言って少年の後ろを指差す。そう、敵が居る方向に。

「此処でお話ししている暇は、無くなった様だよ。本当に、運が無いな」

僕はそう言って、魔法煙草に火を付ける。僕達の前に立ちふさがったのは、白いコートを着た大男。恐らくは別世界からの侵略者の一人。つまり、白協会からの使者。そしてその中でも、幹部並みの力を持った男なのだろう。全く隙がない。隙と思われる所は、全て誘っているであろう。何よりも身体からあふれ出てくる闘気、覇気、そして殺気がそれを物語っている。

「エクス・パラディン
聖剣騎士」

僕はそう呟いた。すると、頭の中に情報が流れ込んでくる。

白協会最強の使徒「シュヴァリエ・コシユマイル」 Lv80

とんでもない敵が来たようだ。

「我は汝らに問う。汝らは何ぞや?」

男が突然口を開き、そう聞いて来る。だから僕は、自分の職業の分類を教えた。

「僕達かい? 僕たちは傍観者さ」

勿論、これで納得するとは思っていない。

そう思っていると、再び聞いてきた。

「ならば汝らに問う。汝らの存在は必要か?」

そんな事を聞いて来る。

存在が必要か必要じゃないか。それを決めるのは人間には無理だ。神でないとそれは決められないし、分かりもしない。そして僕はその神の存在すら興味がない。

「存在が必要? そんな事は知らないよ」

最善の回答だと思う。

しかし、そう答えた瞬間、硝子の割れる音と共にBGMが変わった。

「地はあなたのためにのろわれ、

あなたは一生、苦しんで地から食物を取る。

地はあなたのために、いばらとあざみとを生じ、

あなたは野の草を食べるであろう。

あなたは顔に汗してパンを食べ、ついに土に帰る、

あなたは土から取られたのだから。

あなたは、塵だから……塵に帰れ！」

男はそう言うのと飛び掛かってくる。

「死ね罪人共おおおおお!!!」

ルガアと言う奇声上がるのではないかと思う位、大声でそう叫ぶ。

「フツ、猪の様な男だ。下がって居ろ、死にたくなければ」

僕は少年を後ろに下がらせ、魔王剣を抜いた。

そして、戦闘が始まった。

3

「だああああうううううううう!!!」

男は奇声を上げながら、僕に斬りかかってくる。僕はそれを受け止める。しかし、この男の力はふざけていた。

「クツ、馬鹿力が！」

「ハツハツハ！ 楽しいな、罪人よ！」

男はそう言うのと、僕と少し距離を置く。

「懺悔せよ！ 自分の罪を言い表せ！

さすれば神は、真実で正しい方だから

その罪を許し、清めて下さるだろう。

だから私が、汝らを神の元へと葬ってやるう」

この一文、何処かで……ああ、ヨハネの手紙の一文か。さっきの塵に帰れとかもだが

「五月蠅いよ、聖書マニアが。何が神だ、馬鹿馬鹿しい」

下らない。人間の作りだした意識の産物のくせに。それに、君達の世界には神の存在すら意識しない者が居るんじゃないか？ だからこの世界に侵略出来ているのだろうが！

「黙れ罪人！ 地の果てまで全ての人々が主を仰いで救いを得る。

神は主のみ、主以外に神は、他には居ない」

クツ、舌戦だと話しにならない。何でも神、神、神、神、ああ五月蠅い！

僕がそう思っていると、男が口を開く。

「罪人よ、貴様も信仰せよ！

信仰がなくては、

神に喜ばれることはできん。

神に近づく者は、

神がおられることと、

神を求める者には

報いてくださる方であることを、

信じなければならぬのだ」

だから、僕は神と言う存在を否定する者だよ！

「別に僕は神を信じて居る訳じゃない！」

「ぬわぁんだとおおおおお！！！」

僕のその一言に、男は大声を上げて激怒する。

「五月蠅い！ 魔王狂乱！」

僕はスキルを発動し、男に攻撃をした。

「屑が僕に太刀向かうな！」

僕の言葉と共に、男は血まみれの状態で倒れていく。しかし

「神は我を癒してくれる！」

全て、疲れを持った人は、

重荷を負っている人は、

主に救いを求めよ。

さすれば、主は我々を癒してくれる

疲れと癒し！」

男はスキルを発動し、傷を回復させた。そして再び立ち上がり

「ハツハツハ、この程度で私を倒すことはできんぞ罪人よ」

ほう、これは面白い。実に、面白い。

「……………ククッ」

思わず笑みがこぼれる。

「ククッ……………フハハハハハハ！！」

声を上げて笑ってしまった。しかし、それほど愉快な気分なのだ。

「何がおかしい！」

男がそう怒鳴る。

「興が乗ったよ聖書マニア！ 良いだろう！ 君は僕が相手するに

ふさわしい存在だ」

そう言い僕は、再び魔皇剣を男に向ける。

「僕からの贈り物だ。受け取るが良い！

狂乱獄殺！！」

僕はそう言い、スキルを発動させ、何十回も男を斬りつける。

「なあに！？」

先ほどとは比べ物にならない位なので、男が驚愕の声を上げる。

「どうした？ この程度なのか？ ならば君は僕の前に現れ、何が

したかったんだ？」

僕にどんどん押されていく男。そして男は、僕の攻撃に耐えきれ

なかったのか、その場に倒れた。

「グウ、今のままでは殺し切れん……………次は殺す、必ず殺す、だから

せいぜいその時まで生き残れ罪人よ」

そう言くと男は、スキルを発動させたのか、この場から消え去った。

その瞬間にBGMが変わり、戦闘結果が頭の中に流れ込んでくる。

獲得経験値	∴	213998
ボーナス経験値	∴	000143
獲得金額	∴	023156
最大Hit数	∴	000143
戦闘時間	∴	1322.9
獲得ポイント	∴	000065

アイテム”白協会の聖書”を手に入れた。
アイテム”狂気の聖剣騎士のコート”を手に入れた。

戦闘結果が流れ終わり、僕は少年の方を向く。

「……………フンッ、僕もこのまま死ぬ訳にはいけないのでね。さて、大丈夫かい？」

僕は少年の無事を確認すべく、そう聞いた。

「あ、はい」

少年はそう言いながら頷く。

「そう、なら良かったよ」

オツと、煙草が切れているね。

僕は新しい魔法煙草を取り出し、火を付けた。

「さてと、僕は行くとするよ。君も頑張って生き残るんだ。良い事があるかもしれないよ？」

僕は少年にそう言っていると、瞬迅移動を発動させ、この場から去った。

同業者と対立者（後書き）

「地はあなたのために」と書いた一文は、創世記3章18～19節より。

その分の決め台詞ともなる「あなたは、塵だから……塵に帰れ！」は、創世記3章19節、「あなたは、ちりだから、ちりに帰る」より。

「懺悔せよ」と書いた一文は、ヨハネの手紙 第一 1章9節を多少変えて使わせていただきました。

「信仰がなくては」と書いた一文は、ヘブライ人への手紙11章3節より。

「神は我を癒して」と書いた一文は、マタイの福音書11章28節を多少変えたものを使わせていただいております。

本作品第五部の同業者、そして対立者と同じ内容です。

メンテナンス（小説筆記）を開始します。

R u i n P e r f e c t G e n e s i s (前書き)

システム(小説)の更新完了

R u i n P e r f e c t G e n e s i s

1

R u i n P e r f e c t G e n e s i s P l a n。通称R P G
計画。リーデルトと僕の願い。この世界の未来が、この計画に掛か
っているといつても過言ではない。近い将来、この世界は滅びるら
しい。リーデルトがそう言っていた。本当かどうかは分からない。
しかし、こんな大それた嘘を吐くような奴ではない。リーデルトは
昔、自分の事をこの世界の創造者と言っていた。自分の想像が、こ
の世界を創造してしまったと。

ならば、この世界が滅びぬように想像すれば良いのではないかと
僕は思った。しかし、それでは意味が無いらしい。いくら想像した
所で、もう創造されたモノには干渉できないとのことだ。しかし、
ある事を行えば、干渉を一時的に行う事が出来るようになるらしい。
それが

2

「完全に近い創世記を破壊する事？」
僕はリーデルトの言葉に疑問の声を上げる。
「うん、そうだよ。この世界を破滅から救うには、それをしなければ
ならないのさ」

淡々と答えるリーデルト。しかし、創世記の破壊とはどう言う事

なのか？

僕の疑問に答えるように、リーデルトが口を開く。

「創世記を破壊するってことは、その世界の創造元を破壊するってことなのさ」

「創造元を破壊する？ いや、しかし創世記は、昔の人が書いた想像の産物だろう」

想像の産物を破壊して、世界が救えるなら誰も苦労はしない。

「うん、確かにその通りだね。ならシエオルに質問。この世界はどうやってできた？」

「この世界はどうやって？ お前自身が昔

「ッ！？ そう言う事が」

「うん、理解が早くて助かるよ」

「この世界はリーデルトが想像して創造されたモノ。想像は創造に変わる。世界だってその力には勝てない。創世記が想像された世界は、その世界の始まりが創世記の内容にすり替わると言う訳だ。

「しかし、完全に近い創世記とは、どう言う物なんだ？ それが分からなければ、意味がないぞ」

壊す物が分からなければ、何もできない。

「大丈夫。それは私が知っているから」

「そうか。じゃあ今度は僕から質問だ。何故創世記を破壊すると、世界に干渉で切るようになるんだ？」

正直これに関しては想像がつかない。創世記を壊しただけで世界に干渉する力を得れると言う事が。

「創世記を破壊するってことは、その世界の創造元を破壊するってことだよ。創造元がないとその世界は存在できないんだ。だってそうでしょ？ 物を作る時、それが作られたという事実がなければ、それは作られてないんだから」

「ちよつと待て！ それでは、創世記を破壊した場合、その世界は消えると言う事が！？」

「え、そうだよ。世界が消えれば、世界の均衡が崩れる。そして全

ての世界は、それを修正しようとするんだ。すると世界の結界が一時的に崩れるんだ。そこで、修正を加えるんだよ」

簡単に言うところ言う事だ。世界相手にハッキングを仕掛けると言う事。

「だが、創世記を破壊した世界はどうなる？ そのまま消え去ると言う事じゃないだろ？」

「お、良く気付いたね。その通りだよ。創世記を破壊されなかつて言う世界線が修正をかけるから、一時的に消えるだけだよ」

それならば良いが。しかし、完全な創世記とはどのような物か気になる。正直、読んでみたい位だ。

「なあ、完全な創世記が有る世界って、どんな世界何だ？」

僕はリーデルトにそう質問した。率直な疑問。そんな創世記が有る世界は、それは凄い世界なのだろう。

「どんな世界ねえ……。そうだね、簡単に言うならば、様々な世界に干渉している世界だよ」

様々な世界に干渉している世界だと！？ 凄い世界じゃないかそれは！？

「疑似世界だけど、その世界に限りなく近い世界を作り出している世界なんだ。そしてその疑似世界は数えきれないくらい作られている。つまり、他の世界を観測できる存在が多く居ると言う事さ」

「凄いな。じゃあもう一つ聞く。その世界の名は何だ？」

「その世界の名前。それは……」

妙な沈黙が襲う。まあ、破壊する世界の名前だ。気になっても仕方のない事だと思う。

そう思っていると、リーデルトが口を開いた。

「……………地球。それが、完全に最も近い創世記が存在する世界さ」

Ruin Perfect Genesis。簡単に訳せば、破壊される完全な創世記。そして、この計画を実行するための条件がそろったのがつい先日。今僕が鍛えている三人の事だ。リーダー曰く、この三人なしでは、この計画は絶対に成功しないらしい。

しかし、計画がやつと発動できると思った矢先、白協会と言う奴らの侵略。そして、奴らの中でも飛び抜けた力を持ったシユバリエ。この計画は何としてでも成功させなければならぬ。

だから僕も、もう一度修業をしなければならぬようだ。目標はレベル120と言った所だろう。そして、リーダーが言っていた、最期の転職を行わなければならぬようだ。流石に、この世界が滅ぶのは嫌だ。世界が滅んでも、恐らく僕は生き続けるだろう。僕は自分の平穩の為に、剣を抜く。誰に何と言われようが、これは変わらない。

「フツ、あの仲良し三人組の修業も、もう少し厳しくしなければいけないようだな」

少し笑いが零れる。三人のレベルは着実に上がってる。近々、白協会との戦闘もあるだろう。その時に備えて、鍛えておく事にしよう。

僕はそう思い、椅子に座った。辺りは暗く、何も無い。その暗闇の中にある一点の光は、僕が吸っていた煙草から発せられるモノだけだった。

Ruin Perfect Genesis (後書き)

メンテナンス(小説筆記)を開始します。

この更新後、申し訳御座いませんが、暫く更新する事ができません。理由としましては、自分の通っている学校のテスト期間に突入したからです。

こんな駄文でも、読んでいただいている皆様には申し訳ありませんが、このテストでへマすると、就職や進学にも関わってきますので、ご了承いただけたら幸いです。

最終転職（前書き）

システム（小説）の更新完了

久々の投稿です。

三人の修業を引き受けて、もう三年が立った。三人ともLv90になり、転職を終えた。

裂夜はバトラーから執事長、そして執事長から戦闘執事に転職した。レベルもさることながら、バトラー系統の能力の高さから、このレベルまで来ると、エンカウトモンスターは敵ではなくなつた。

朔夜はメイドからメイド長、そしてメイド長から戦闘メイド（バトルメイド）に転職した。朔夜も裂夜同様、職業上の能力の高さから、エンカウトモンスターに敵はおらず、更に裂夜との連携攻撃が恐ろしい程上達した。

葵はロードから七人貴族、そして七人貴族から皇帝に転職した。ロードの時は殆どが補助魔法だったのに対し、皇帝にまでなると攻撃魔法も多彩で、その威力もかなり高くなつた。

さて、そんな中僕のレベルは120まで上がった。しかし、転職はまだ終わっていない。転職にはそれぞれ決まつた課題が存在する。例えば、裂夜が執事長になるには、自らが使えるロードが動けない状態で30体のモンスターを1時間耐久で倒し続ける事だった。同じレベルのモンスターを1時間耐久で倒し続ける事だった。

敵を倒すような簡単な試験なら僕は何の抵抗も受けずに、すぐ終わらせる自信がある。まあリーデルトの事だから、そんな簡単な試験でない事は分かっている。

だからこそ僕は完全な状態の今、リーデルトの前に立ち、最終転職を開始しようとしている。

「おやおや、シエオルじゃないか！ 今日は何のよ」
「分かっているのに聞くのか？ まあ良い。転職しにきた。それだけだ」

「……成程ね。白協会が現れてから三年。あれから奴らは全く攻めて来なくなつた。不気味なほどにね。そして、来るべきRPG計画遂行のための転職と言つ訳だね」

「フンツ、分かっているなら聞くな。さあ、転職の課題を言え！」
僕はそうリーデルトに言った。すると普段は吸わない魔法煙草を手にし、火を付けて吸う。そして煙を吐き出し、そのまま煙草を握りつぶした。

「……まず君に聞かなければならない。君は、魔、冥のどちらを選ぶ？」

そう言つて潰した煙草の吸殻を、上に投げた。その瞬間、僕の頭に情報が流れ込んでくる。

（エグゼキューション系系統の最終転職）

魔剣騎士からの転職は次の二種の職業の内、どちらか一つの選択となります。

魔王

圧倒的な破壊力を誇る魔法を多く習得し、敵を圧倒します。そのため、魔力が大幅に増大し、魔法攻撃のステータスも大幅に上昇します。そのかわり、今まで大幅に上がっていた斬り攻撃、速度のステータスの上昇が少なくなり、運氣も極端に下がります。しかし転職後、習得するスキルは全てレベルマックスの状態で習得が可能となります。

冥王

即死魔法、即死スキル、もしくは即死レベルのダメージを与える魔法やスキルを多く習得します。ステータスの上昇は今まで通りですが、転職後は魔力、斬り攻撃、魔法攻撃、速度のステータスが大幅に増大し、新たな特殊スキルやスキル、魔法を習得します。しか

し、今まで覚えた特殊スキルやスキルや魔法は一部を除き使えなくなります。

……成程。どれか一つを選び、転職すると言う訳か。魔王は力でも強くなれる。しかし、魔王を選んだ場合、今まで魔法を殆ど使わなかった僕が、魔法を使った攻撃にどれくらいの時間をかけて慣れるかが問題だ。

逆に冥王を選んだ場合、今まで使っていたスキルが使えなくなるのが痛い。やはりハイリスク、ハイリターンと言った所だろう。さて、どうするか。

「私は魔王がお勧めかな？ 課題的にも、習得する力的にも」

「……聞いていなかったな。課題は何だ？ 勿論、職業により違ってくるだろう？」

僕の問い。リーデルトは暫く黙ったままで口を開かない。しかし、僕が魔王剣を抜こうとしたら、渋々リーデルトは口を開いた。

「はあ…、課題だったね。まず、魔王の課題だ。魔王の課題はある二体の魔物の討伐。一体目は魔界の入口に存在する神獣、メガロデイノレオンの討伐。二体目は人間界の魔界と呼ばれる地獄谷に存在する魔神、シャイターンの討伐」

「メガロデイノレオンにシャイタンだと…」

メガロデイノレオンとは、全長三十メートル程の獰猛な化物。そしてシャイタンとは、それは人間界に存在する魔物の王と言われている化物。

「で、次に冥王になるための課題。それはある一体の魔物の討伐」

「一体だと？ だったらこっちの方が楽だろ」

ならばなぜ、リーデルトは魔王がお勧めと言ったのだろうか？

いつものおふぎけの雰囲気ではなかったし。

「楽か。クスクスクス。君は面白い事を言うね」

「ハア？ いや一体か二体かと言ったら、一体の方が楽と言う事は

誰にでもわかるだろ」

「確かにね。でも、君が討伐するのはただの魔物じゃないんだよ」

「ただの魔物じゃない？ とてつもなくヤバい奴を討伐するとかか？

「君が討伐する魔物。それは……………現冥王、タルタロスの討伐だ」

「な！？ タルタロスだと！？」

タルタロス。それは冥府の王であり、神である存在。一般的に冥王はハーデスと言う解釈が多い。確かに、ハーデスは冥王であるが、それは冥府の上層部に過ぎない。ハーデスの納める冥府ハデスの更に奥底にある冥府。神すら怖れなす淀んだ空間の冥王こそがタルタロスである。

「さあ、これを聞いたうえでもう一度聞く。どっちの職業を選択するかをね。あ、ちなみに行き帰りは私の転移で送ってあげるから心配ないよ」

前者も後者も鬼門か。しかし、より強大な力を求めるなら冥王を選ぶだろう。しかし、習得するスキルレベルが最大と言うのは魅力的だ。さて、どちらを選ぶか。

「まあ、簡単な方は魔王だね。でも、シャイターンの持つ特殊魔法はちょっと厄介だけだね。ちょっと待ってて、今情報を流すから」
リーデルトがそう言い、手をかざす。すると頭の中に情報が流れ込んできた。

メガロデイノレオン

圧倒的な攻撃力を誇る魔物です。スキル、大牙暴喰は一撃必殺となります。

シャイターン

現世の魔王と呼ばれる魔物です。スキル、地獄召喚は回避不可攻撃となっています。特殊魔法、失楽園は一撃必殺となります。

タルタロス

冥界の奥底に住む冥府の神です。スキル、タルタロス死神召喚、アタナトイ不死軍隊は

一撃必殺となります。

「……成程、どれも面倒だな。タルタロスに関しては、一撃必殺スキルが二つもあるなんて」

「いや、厳密に言えばタルタロスが使うスキルは、ほぼすべてが即死スキルだよ」

「何!？」

「上記二つはその中でも回避がしにくいスキルさ」

それはまた面倒くさい。しかし、来るべき戦いに備えるとしたら冥王が良い。即死スキルは魅力的だ。ならば、僕は

「冥王を選択させてもらうよ」

「……………そう、君ならそう言うと思ったよ。別に良いんだけどね。じゃあ、タルタロスの元に行っておいで」

そう言いリーデルトが指を鳴らす。すると転移が発動し、僕はこの場から消え去った。

2

転移で飛ばされた空間。目に張りつくような暗闇で、一メートル先も見えない。失明したのではないかと錯覚するような暗闇。しかし、次の瞬間、紫色の炎が灯り、辺りを照らす。そこにいたのは身長約三メートル程の大男。長い黒髪に漆黒の衣服をまとい、肌は死体の様に白い。そして、その男が発する雰囲気は、人間では考えられない位、不気味なモノだった。

僕は理解した。この男が、タルタロスなんだと。

「フム、久シブリダナ。此処ニ来ル生者ハ。イヤ、我が冥王トナツテ、初メテダロウ。サテ、汝ハ何故コノ第十三奈落、神スラ恐レナスコノ空ウ間ニ来タノダ？」

そう問うタルタロスの声は、まるで奈落の底から地上に聞こえてくる死へ誘う声に聞こえた。

「僕が此処にきた意味は……………君を討伐し、僕が新たな冥王になるためだ！」

ハツキリとタルタロスに聞こえるようにそう言う。それを聞いたタルタロスの顔は、まるで新しいおもちゃを見つけたような子供の笑みだった。しかし、その笑みには、明らかに殺意が込められていた。ビリビリと淀んだ空気を揺らすように伝わってくる殺意。

まさに冥王。生きとし生けるものが最後に逝き付く、唯一絶対の平等の存在。タルタロスの存在は、それ自身が死であるかのように、不気味なモノだった。

「フウフフ……………フハハハハ！！ 我ヲ！ ワアレヲ討伐！ クウハハハハハハ！！」

大爆笑と言うのが正しい位笑う。しかし、その笑いが死へと誘う音に聞こえてしまったのが、僕だ。不死の身体を持ちながら、死を意識してしまう。

「ハハハハ……………ハア……………笑ワセルナヨ！ 我ヲ討伐スルダト？ 良イダロウ。ソコマデ言ウ汝ノ力……………我ニ見セルガ良イ！！」

タルタロスの言葉と共に、硝子の割れる音が響き、BGMが変わった。

最終転職（後書き）

メンテナンス（小説筆記）を開始します。

転職試験（前書き）

システム（小説）の更新完了

完全なる平等の存在〜タルタロス〜 L V 1 1 3
相手の情報が入ってくると同時に、黒い槍が飛んでくる。僕は魔皇剣を抜き、槍を紙一重のところであわした。

「サア、ソノ生者ノ姿デ冥府ヲ味ワツテ逝ケ！」

巨大な体の長い腕が、大鎌を掴み僕に振り下ろす。僕はその鎌を魔皇剣で止めたが、力が違い過ぎる。このままでは、力押しで負けてしまう。

「クツ、化物が！」

「フンツ、ソレヲ理解シタ上デ此处ニ来タノデアロウ？ 嘆イテモ、今サラ遅イ！」

タルタロスはその言葉と共に、詠唱を開始した。

「
！」

タルタロスの詠唱後、五体の死神が召喚される。

〜死神〜 L V - x 5

これがリーデルトの言っていた死神召喚か！ となると、これを喰らう訳にはいかな

「な！？ 身体が動かない！？」

徐々に死神が近付いて来る。不味いな。身体が動かないとなると……。

「我が目で見た者、捉えて殺せ！」

邪眼術式・見者必殺イワイルアイ！」

術式を発動し、死神を一掃する。その瞬間に、僕の身体は動くようになった。

成程、死神召喚は死神をすべて倒さなければ即アウトと言う訳か。しかも、身体が動かない状態で。おいおい、これはかなり鬼畜だね。「ホウ、死ヲ回避シタカ。ダガ、今ノ八小手調ベダ。次八同時二10体ト行コウカ。」

「！」

再び身体が動かなくなる。そして、発言通り10体の死神が召喚される。

「クソツ、化け物が！」

我が目で見た者、捉えて殺せ！

「邪眼術式・見者必殺！」

僕は全部の死神を見て、一掃した。恐らく、死神自体のHPは10もないのだろう。しかし、触れられた瞬間に終わりと言う訳か。

僕の術式を見て、タルタロスが疑問の表情を浮かべる。

「ムツ？ 余リニモ呆気ナク倒サレテイクナ。ソレニソノ魔法、見タ事ガ無イゾ」

「当たり前だ！ これは僕が作った術だからな！」

「何？ 汝ガ作ツタダト？ ソレハマタ……………面白イ！」

笑いながら大鎌を振るい、斬りかかってくる。力勝負では此方が負ける。かと言って距離を取って、下手に即死スキルを発動されても厄介だ。これは魔王を選んでおけばよかったかも知れないな。まだ僕は一度も攻撃出来ていないし。

「ドウシタ？ ソノ程度力？」

嘲笑う様な感じで、此方を見下しながらそう言った。流石にこれはイラつく。

「そっかい、お望みなら攻撃してあげよう！」

無限獄殺！」

力を抜き、一瞬でタルタロスを20回程斬りつける。そして同時に境界を作り出し、精神もろとも刻んでいく。

「クツ……、中々アルデハナイカ」

強がっているのではないだろう。顔を見ても余裕がある。忌々しい位に。

「そうかい。なら、連撃と行こうか！」

100レベルの時に習得した技。威力だけなら一撃必殺級らしい。未だ使った事のない技なので、僕にも分からない。

僕はタルタロスから、近からず遠からずという距離でスキルを發動した。ゆっくりと魔皇剣を薙ぐだけ。

「……………大神殺し」

その瞬間、タルタロスの身体から、大量の血が噴き出る。

「グガア……………何ダコレハ！？ フツ、面白い。シカシ遣ラレテバカリハナア……………我モ反撃トイコウカ」

そう言つとタルタロスは、自分の首筋に鎌の先を軽く当て、斬り裂いた。

「
血が噴き出て、辺りを赤く染めて行く。そして

「
スキルを発動した。」

タルタロスの血が見る見る中に形を変えて行く。そしてそれは無数の兵士に変わった。

「サア、死ンデ冥府ニ引キ摺リ込マレルガ良イ！！」

兵士たちは僕を囲むように集まり、手に持つ鎌を振りあげた。

「チツ、仕方がない。」

世界は焼きつき大地は炭と化す！

魔皇剣！ 六号解放！

第六熱魔皇剣・レーヴァテイン！」

剣が光り出し、白い炎が噴き出す。僕はそれを、地面に突き刺した。すると、炎は地面を燃やし、周りにいた兵士たちを、消炭に変えた。そして炎はそのまま、タルタロスを燃やす。

「〜ツツ！？ 奥儀力！？ 成程……少し八遣ルヨウダ」

燃やされてなお、ニヤリと笑い続けるタルタロス。どんな化け物だよお前は…。

「シカシ、存外二今ノ八効イタゾ。面白い。我モ奥儀ヲ使ウトスルカ」

「そう言つと、タルタロスは詠唱を開始する。」

「不味い！？ 確実に即死スキルだ！ 発動する前に倒さなければ！
僕は詠唱をしているタルタロスに、攻撃を与え続けた。」

「地獄降誕！！ 狂乱獄殺！！ 無限獄殺！！」

「三回連続でのスキル使用。MPに関しては問題ないが、まるでダメージがない。」

「タルタロスの詠唱は続く。その声は、まるで冥界から死神が、僕を殺しに近づいてきているようだった。」

「不味い！」

奥儀はさっき使ったので使用は暫く出来ない。攻撃はまるで意味

がない。これは避けるにこしたことはないな。しかし、相手の技がどんなものか分からなければ、避けようがない。

「タルタロスは詠唱を終えて、此方を見る。」

「サア、我二祈ルガ良イ。ソシテ、我ヲ受け入レルノダ」

「そう言うとならタルタロスは両手を掲げ

「奥儀を発動した。」

3

息が苦しくなる。頭が割れる様に痛く、体中から血が溢れだす。

何なんだこれは！？ タルタロスは、なにを発動したんだ！？

完全即死スキル？ いや、それはあり得ない。リーデルトの話したと、完全即死スキルは存在しないとのことだ。ならば何だ。確実に当たれば即死と言う事が分かる。完全即死はあり得ない。しかし、ただの即死スキルでは無い。ならば何だ？ 死神召喚の様に、動きを封じて攻撃をしてくるスキルか？ いや、それも違う。そもそも僕自身動くことはできるし、攻撃要因のタルタロスは動かない。更に言えば、何かを召喚する気配もない。残るは

「！？ 時間設定スキルか！」

時間設定スキル。これは決められた時間内に相手を倒さないと、完全即死スキルが発動されると言うものだ。完全即死スキルはそれだけでは存在していないのだが、ある特殊条件下で有れば数えられる位だが存在しているらしい。その内の一つが時間設定スキル。

「サア、冥府ノ宴ノ始マリダ。楽シンデ逝クガ良イ」

「チッ、とことん即死スキルを使ってくる化け物が！ 奥儀は？」

ダメだ、EXゲージがまだたまっていない。

「大神殺し！ 無限獄殺！ 狂乱獄殺！」

僕は今使える最高のスキルを連発し続ける。しかしダメージは皆無。こうしている間にも、タルタロスの設定した時間が刻一刻と迫って来ている。

何か打開策はないのか！ 粗方、僕が発動できるスキルは発動しつくした。後残っているスキルは………死刑執行。1/3の確率の即死スキル。しかし未だ成功したためしがない。まあ僕が使わないだけなのだが。

もし僕の考えが正しければ、このスキルは成功するはず。失敗したら終わり。命を賭けた賭けだが

「でも……やるしかないようだね」

僕はそう呟き、タルタロスに対しスキルを発動した。

「死刑……執行！！」

タルタロスの体を剣が貫く。

「フツ、何ヲシテモ無駄ダ」

結果表示までの約1.5秒がとても長く感じる。成功すれば僕の勝ち。失敗すれば僕の負けが確定する。そして、結果が表示された。一文字で

C R I T I C A L

と。

「ガア！？ 何ヲした！？ ！！ 即死スキルカ！」

タルタロスの発動していたスキルが中断され、赤い血が辺りに飛び散る。

「フフフ、僕の勝ちだね」

此処で即死スキルが成功するのは奇跡と言うべきなのだろうが、しかし僕はそうは思っていない。僕はタルタロスの存在をあることに例え、賭けをして見たのだ。それはタルタロスが一番下の冥府の王であり、冥界の神であったからこそできた賭け。僕はタルタロスの存在そのものを、死と考えたのだ。自らが死そのもので有れば、

即死スキルによる死、つまり自分自身を受け入れないことはできないと考えてたのだ。

死であるから故に、死を拒否する事が出来ない。それは自分自身だから。タルタロスにのみ有効な手段。他の敵で有れば、こつも簡単に即死スキルが成功する訳がない。

「フフツ……フハハハハ！ 我ノ存在ヲ見抜イタカ！！ 面白イゾ人間。良イダロウ。我ヲ倒シタノダ、冥府ノ王ノ称号ヲ手ニスルガ良イ」

そう言つと、タルタロスは黒い霧となり消えて行つた。

獲得経験値	∴	6	6	6	6	6	6
ボーナス経験値	∴	0	0	0	3	2	2
獲得金額	∴	6	2	6	4	1	3
最大Hit数	∴	0	0	0	3	2	2
戦闘時間	∴	4	3	3	1	.	2
獲得ポイント	∴	0	0	0	6	6	6
LV122に上がった							
アイテム”冥王の黒衣”							を手に入れた
アイテム”冥府の双鎌”							を手に入れた
アイテム”13本目の魔皇鎌”							を手に入れた
アイテム”冥府の魔石柱”							を手に入れた
アイテム”冥界神の書物”							を手に入れた
アイテム”冥王の紋章”							を手に入れた

多分だが、死んではいないのだろう。存在自体が死であるタルタロスが死ぬことは多分だがあり得ない。勝負という名目では負けとなるのだろうが、存在自体は絶対に死ぬ事がない。

全く、何処まで化け物なんだ奴は。

そんな事を考えていると、僕の足元に魔法陣が形成された。僕はその魔法陣に従い、この場所から消えた。

転職試験（後書き）

メンテナンス（小説筆記）を開始します。

冥王 ～白協会による侵略の始まり～ (前書き)

システム(小説)の更新完了

冥王　く白協会による侵略の始まりく

1

「転移で飛ばされた先は、僕がタルタロスと戦う前にリーデルトといた場所だった。僕の転移が終わると、目の前には当然のようにリーデルトが立っていた。」

「うんうん、やっぱり君なら合格すると思っていたよ。ボロボロになっっているけど」

「そう言っつてリーデルトはニコニコしながら近づいて来る。まあ確かにボロボロではある。あのバカげた力、そして豊富でチートレベルの即死スキル。更に言えば存在そのものがバグキャラだったタルタロス。そいつと戦って無傷で帰ってくるのは恐らく無理だと思う。もう二度と戦いたくない。」

「さてと、じゃあ君を冥王にしなければね」

「リーデルトはそう言っつと、ズボンの中に手をつっ込んで一枚の紙を取り出した。」

「何処から取り出しているんだ君は……」

「まあまあ、良いじゃないか」

「笑いながら紙を破いたリーデルト。その瞬間に、僕の身体を黒い影が包み込む。」

「チッ、気持ちが悪いなこれ」

「仕方ないだろ？　まあでも、転職は完了したよ」

「僕はそう言われたので、ステータスを開いた。」

シエオル・アイン・ソフ　L V 1 2 2

職業

冥王

ステータス

体力：6041

魔力：3460

突き：909

斬り：2522

魔法：1567

防御：417

対魔：430

技量：578

回避：593

速度：2395

命中：580

特殊スキル

死神（LV○）：敵を倒すたびにHPとMPを大幅に回復する。

冥王（LV○）：敵を倒すたびに即死スキルの確立がアップする。

冥神（LV○）：MPを消費する代わりに、次の攻撃は当たれば敵を即死させる。

冥界門（LV○）：敵を倒した時に上昇するEXゲージの上昇率が大幅に上がる。即死スキルが成功した場合更に上昇する。

十三本目の鎌：装備している冥王大鎌の攻撃力をアップする。

習得スキル

死刑裁判（LV○）：1/2の確率で一撃必殺。

九死一生（LV○）：9/10の確率で一撃必殺。

十三奈落（LV○）：攻撃が当たった相手を十三奈落到落とす即

死スキル。

冥界降誕（LV○）：冥府の一部を召喚し、即死級のダメージを与える。

死神召喚（Lv.○）：相手の動きを止め魂を攻撃する即死スキル。
不死軍隊（Lv.○）：不死の軍を呼び出し、相手を殺す即死スキル。

魔皇剣（Lv.○）：魔皇剣の内どれかをランダムで呼び出し、即死級の一撃を相手に与える。

習得魔法

小炎（Lv.1）：マッチより少し大きい位の火を出す。

斬首台（Lv.○）：即死魔法。

冥界接続（Lv.○）：自らの体の一部を冥府と接続する即死魔法。

反魂（Lv.○）：戦闘不能になった仲間をHP1/2の状態
で復活させる。

殺指揮者（Lv.○）：即死級のダメージを与える大魔法。

瞬迅移動（Lv.○）：一瞬で一度行った街に転移する魔法。魔法
レベルはない。

ポイント

2766

装備

冥王大鎌（取り外し不可）

冥府の黒衣（取り外し不可）

黒いブーツ（取り外し不可）

見えない手枷（取り外し不可）

見えない足枷（取り外し不可）

黒蝶の髪止め（取り外し不可）

黒金剛石の十字架指輪

所持金

647492ギル

所持アイテム

低反発枕

HP回復薬（大）×697

MP回復薬（大）×703

魔法煙草×

シンプルな仮面

スキルや魔法が変わってしまったな。装備品も変わっているし。それに殆ど即死か。とち狂った能力じゃないか。まさに冥府の王って感じた。この様子だと奥儀もタルタロスが使っていた物に変わっている可能性があるな。全く、バグキャラ此処にありだな。他の職業に比べて能力が高すぎる。

「ウワァ…、自分で設定したのにこの能力は……少し引くなあ…」
リーデルトは苦笑しながら僕のステータスを覗きこむ。

「フツ、確かにこれはやり過ぎだと思っよ。まあ僕には関係ないけどね」

自分の能力だしね。それに能力は高いけど最強という訳じゃないし。即死スキルだつて相手にかわされたら意味がない。倒せない事もないが、ゲームにするならばラスボス並みに偉い奴的な感じになるだろう。

「さてと、じゃあ行くとするよ」

「そうかい。じゃあまた今度ね。私は暫く此処にいるから、用があるなら来ると良いよ」

僕はリーデルトの言葉を聞き、この場所から去った。

2

一人の男、シュバリエ・コシュマールが暗い螺旋階段を上っていく。一步、また一步と歩いていく。そして一番上の扉を開いた。

そこには白い服を着た白協会の兵士たちが塔の下に集まっていた。シュバリエは手を上げ十字を切った。

「諸君！ 我等の神に祈りを捧げよ！」

シュバリエの声と共に、十字を切り跪く兵士たち。

「世界を越え集った同志たちよ！ かつて白協会第14支部だった世界は今や変わり果てた。我等が御神を仇なすようになってしまった。愚かな罪人となり果てた。だからこそ我は！ 我々は！ 奴らに神の鉄槌を振り下ろさなければならぬ！」

しかし！ 振り下ろすのは神の力では無い！ 我等の力だ！ 愚かなる罪人となり果てた奴らに我等が神の力を振るう等愚の極み！ 教えてやるのだ！ 我等が力を！

諸君らに問う！ 我等が神とはなんだ？」

シュバリエの言葉に全員が立ちあがり、一斉に手を上げて口を開いた。

「我等が神は我等が救済者！ そして何人たりとも拝み事の出来ぬ絶対の存在！」

「では我等白協会とはなんだ？」

「白協会は救済者に感謝を忘れず祈りを捧ぐ者！ 救済者を貶める罪人共を滅する救済者に認められし罪人である！」

「では我等が罪は何だ？」

「我等が罪は兄弟を殺した事！ 救済者を貶める兄弟を滅した事！」「その通り！ 我等もまた罪人である！ 罪人となり果てた兄弟を殺した罪人である！ 我等白協会、与えられた使命を全うしたならば、自らの命を神への供物としささげる事を誓いとすれば、我等が罪をも神は救済してくれるであろう」

シュバリエがそう言い手を天高く挙げる。その瞬間、兵士たちは自らの武器を天へと向けた。

「罪人である我等までも救済して下さる救済者！ 我等は貴方様の為に、この命が例え散るうとも、貴方様を貶める罪人共との戦いを望ませていただきます！」

そして全員が武器で十字を切り武器を納める。

「よろしい。ならば諸君！ 我等が攻め落とす場所は何処だ？」

「元白協会第14支部！」

「ならば諸君！ 我等が行う事は何だ？」

『再征^レ服^ン運動^ダ！！！！』

シュバリエは十字剣を抜き、地面に突き刺し叫んだ。

「諸君よ！ 時は来た！ 元白協会第14支部の世界に対する再^レ征^ン服^ダ運動^ダの始まりだ！」

十字剣を地面から抜き、はるか地平線の向こうを刺した。そして一人の男がシュバリエの横に立ち一言。

「コシユマール將軍に続けええええええええええ！！！！」

『ウオオオオオオオオ！！！！』

白協会による、侵略がその声と共に始まった。

冥王 ～白協会による侵略の始まり～（後書き）

メンテナンス（小説筆記）を開始します。

侵略は突然に（前書き）

システム（小説）の更新完了

侵略は突然に

1

冥王に転職して一週間。三人に修業を付けていた。転職後異常なまでに強さが上がった僕に、三人は若干引いていたが、だんだん慣れて来たのか今では何も言わなくなっていた。

さてと、今日も三人をシバき上げるとするか。

僕はそう思い家から出た。その瞬間、何かの気配を感じた。三人の気配では無い。敵の気配。

「……………白協会か！？ 間違いない！ この感覚はシュバリエのものだ！」

とうとう攻めて来たか。白協会が。

僕がそう思いながら魔法煙草に火を付けていると、リーデルトが三人を連れて転移してきた。

「シエオル！」

リーデルトが僕の耳元で大声を出す。

「……………五月蠅いよ。叫ばなくても聞こえている」

煙を吐き出しそう一言。三人は状況がつかめていないのか、混乱の表情を浮かべている。

「…………クレイフル、ミステイン、バーチカルト……………」

「な、何を言っているんだシエオル？」

裂夜がそう尋ねてくる。僕が言った言葉はこの世界にある都市の名前。この三つの都市が

「消滅したようだね」

『!?!?!?!?』

三人も都市の名前は知っていたのか、僕の眩きに驚愕の表情を浮かべた。

「どうやら、ロンバルトが白協会と繋がっていたようだよ」

リーデルトがそう言う。

ロンバルトとは、マーシア八教と言う宗教の狂信者達が住む都市の名前だ。リーデルトがこの世界の摂理を作る前から、このロンバルトの概念は存在していたらしい。マーシア八教は何が発端となり生まれたのかは不明とのこと。

全く、厄介な話だね。白協会にマーシア八教の狂信者の都市、ロンバルトの破壊及び制圧。落とされ白協会に飲み込まれた都市の国土回復。そしてRPG計画の遂行。やることが山積みじゃないか。本当に面倒だ。

「リーデルト、三人には説明しておいてくれ。早速アレを発動する」

「アレをかい？ 少々早すぎやしないか？」

「フツ、問題は無いだろう。どうせすぐにゲージは溜まる」

僕はそう言うと、四人の元から消え去った。

2

唯一宗教信仰都市〈救済・ロンバルト〉

年の名前が頭の中に流れ込んでくる。都市を見回せば白協会の者どもがウジャウジャと。そのせいで辺り一面が白色で埋まっている。そして僕が着ている服は黒。下手に出て行けばすぐに戦闘になる。しかも戦う相手の人数が馬鹿みたいに多い。しかし

「発動するには丁度いい」

僕はそう眩き、都市の中心部へと入った。その瞬間、硝子の碎ける音と共にBGMが変わり戦闘が始まった。

〈白協会修道士〉 Lv100 x50

〈白協会修道女〉 L V 1 0 0 × 5 0

〈白協会の見習い神父〉 L V 1 0 5 × 3 0

ウワア、今までに相手をした事がない数だね。でも、僕に対して数で攻めても意味がない。

「誰も死から逃げる事は出来ない。

死は絶対的な力だから。

儂く散れ、受け入れろ。我の存在を。

そう、タクトス我の存在が死だ

死！」

タルタロスが使った奥儀を、自らの奥儀として使えるようになった。しかしタルタロスの様に時間設定完全即死スキルではなく、即死級の大ダメージを全ての敵に与えるスキルとなっている。勿論、与えたダメージよりHPが少ない場合は即死だが。

「おや、随分と減つたみたいだね。君達はそんなにHPが低いのかい？」

2 / 3 以上の数が戦闘不能となる。

「君達は弱い。だから……出てくるんだ！ シュヴァリエ・コシユマール！」

僕の言葉と共に、残存していた敵が全て吹き飛んだ。そして、戦闘不能。

「汝、祈りを持ってこれを沈めたまえ

さすれば主は汝を許し

大いなる愛情を注いでくれるであろう

我、主に仕え、汝を裁き

我、主に仕え、汝に許しをこう

主は全てを許し、全てを愛してくれるだろう

主を崇拜し、主を敬え

主を敬愛し、主を畏れよ

主を信仰し、主に仕えよ

さすれば汝が罪は主が許し

「汝は天の獄へよ召されるだろう……」

ぶつぶつと呟きながら近づいて来る大男。

「……久しぶりだなエクス・バラディン聖剣騎士」

「シエノサイダー久しぶりな罪人よ」

空気が変わり、新たに出てきた敵も、凍りつく。白協会最高戦力、聖剣騎士・シユヴァリエ・コシユマル。その男が絶大な殺気を交え会話をしている。そんな中に飛びこむのは自殺行為と言っても過言ではない。そのため、敵は近付こうにも近づけないのだ。

「会いたかったよ、僕の最大の好敵手。君との戦いは、僕の血が騒ぐ」

「カツ！ 貴様なんぞに好敵手呼ばわりされるとは……不愉快極まりない！」

「おや、相変わらず手厳しい。」

「我等は罪人、罪人の群れでしかない。だが、貴様の様な罪人とは違いのだよ。我等は狂信者だ！ だからこそ、主を蔑む有象無象の兄弟たちを滅ぼした！ それ故に罪人！ 罪人なのだ！ だがしかし！！ これこそが我等が生きた証であり、我等が生きる道なのだよ」

「フツ、狂っているね。本当に狂信者という言葉が正しいよ。でもね、君は僕に勝つことはできない」

「……笑わせるなよ、罪人よ」

「笑わせないよ、狂信者。事実でしかないのだから。僕は此処で、この場所で、君を切り裂き、君を突き穿ち、君を殺す」

僕の言葉と共にBGMが変化する。

「貴様は此処で俺に殺される。我が使える主に抱かれ死ぬが良い」
「その主はこないみたいだね」

「貴様なんぞに姿を現す訳がない。だからこそこの俺が、主に変わり、貴様を縊り殺す！」

「狂信者が……、その信仰と言う深海に沈み死ね！」

その瞬間、硝子が砕ける音が響いた。

侵略は突然に（後書き）

メンテナンス（小説筆記）を開始します。

まだ進路が決まっていない状態なので、何時更新できるかは分かりませんが、少しずつ書いていく予定ではいます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5758t/>

R P G

2011年11月23日12時46分発行